
幻想郷の日々

ジャックランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷の日々

【Nコード】

N5285X

【作者名】

ジャックランタン

【あらすじ】

幻想郷の事を全く知らない男がある日、突然出てきた穴から幻想郷に来ることになり、そこで色々ありながらも毎日面白おかしく暮らしていく日常を書いた話です。

第1話 穴から落ちた世界は見知らぬ場所

「落ちるゝ！落ちれば、落ちるとき、落ちるときこそ冷静になれるいー！！」

ただいま俺は絶賛穴の中に落ちている。なぜ？と思う人もいるかもしれない。

大丈夫、安心してくれ！俺も意味が分からない。

始まりは……：そうだな、いつもどおり学校から帰る途中で友達とだべりながら帰っていた。

それで、それぞれ別の道だから分かれて帰っていると足元に急に穴が開いたのだ。

急に穴が開いたら落ちるしかないだろう？俺はなす術も無く落ちてしまったというわけだ。

というか誰に説明してんだろ俺？あれか？空間の中に目玉がいっぱい見えるから誰か見てんじゃないんだろうかという思いからか？

周りは皆目玉だらけ、俺は落ちている……：冗談にもほどがある。

そして目玉が多すぎて気持ち悪い。

何なの？この状況？

そうこう考えていると急に足下の空間が裂けだした。

「お！出口っぽい穴発見」

その裂けたところを見ると空間とは別の光景が見れたので多分出口に違いないだろ。

このまま行くとそのまま外に出られるのかもしれないが俺はそこであることに気づく。

ただいま落下中↓かれこれ5分は落ちている気がする↓穴にそのま

ま入る↓地面に勢いよく叩きつけられる⇨俺死亡

「やばい！やばいんじゃないの俺！？」

そうこのまま行けば高い所から落ちるということになり⇨飛び降り
ということになってしまう。

そんなことは御免こうむると考えるが、どうあがいても落下中なの
で穴から逃げる事はできない。
ただ落ちるだけ。

「おおおおお！死ぬ前に一度だけでいいから綺麗な女とデートし
たかったー！！」

そのまま穴の中に飛び込む（落下する）と、どういいうわけか横から
『すぽんっ』てな感じで出ることができそのまま地面に尻餅をつい
た。

「いてててて………なんとか死ぬことは回避できたけど、ここどこ
だよ？」

周りを見回すと穴から落ちた時とはまったく別の光景。

道路や標識、家やマンションなど都会なものは何も無く無機質な壁
があるだけだった。ん？壁？

「何だここ？俺外にいたはずなのに何で部屋にいるんだ。しかし、
何も無いところだな。」

灰色の壁に頑丈そうな鉄の扉。そしてその反対の壁に普通の木製の
ドアがある。

左右が非対称すぎて違和感を感じまくる。

試しに鉄製のドアを押したり引いたりしてみるが

「だめだ！まったく動かねえ！」

まったくびくともせずドアは開かない。

しかしドアはもう1つあるのでそちらの方に期待をかける。

「木製のドアだから開くんじゃね？最悪開かなくても壊せばいいし。」

非常事態だからしょうがない、ドア事態も後で謝って弁償すればいいだろう。

そう思い、意を決してドアを開けてみるとそのドアはすんなり開くことができた。

「何だか拍子抜けだな。さて、中に何かがあるかなって」

ドアを開けて中を覗くとそこには様々な玩具や子供の絵本そして壁の方にベットがあった。

しかしその中で一際目を引いたのはその部屋の中央に色とりどりの宝石の羽を持った金髪の髪の子が中央に座っていたことだった。

「お兄ちゃん誰？私と遊んでくれるの？」

その女の子はこちらに気づくと無邪気そうな感じで声をかけてきた。何でこんな寂しい部屋に女の子がいるんだ？そう考えるがその前にまずは自己紹介って

「お兄ちゃんは明って言うんだ。日野恭一が名前だよ。お嬢ちゃんの名前は？」

「私の名前はフランドールⅡスカーレットっていうの。よろしくね！ 恭一！」

「ああ、よろしくフランドール。それで、君に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「うん！ なんでも言って！ その代わり後で遊んで欲しいな！！」

子供と遊ぶぐらいだったら別にいいだろう。

俺自身一刻も早く家に帰りたいのだが子供と遊ぶくらいなら時間をとらないだろうと思いき安易に返事をする。

「ああ、それぐらいなら別にいいよ。それじゃあ質問するけどまずここは何処だい？」

「ここは紅魔館っていうの。それでここは私の部屋！」

紅魔館？ 聞いたことがない名前だな。

それにしてもずいぶん物寂しい部屋に住んでいるんだな。それよりもまずは質問だ。

「じゃあ次は、ここは日本のどこなんだい？」

「日本？ 日本って何処？ よくわかんない」

日本を知らないのか？ だったらここは何処なんだろう？ 穴から落ちたので正確な地理がわからない。

髪が金髪だから外国のどこかなんだろうけど。まいったな。

俺外国の金持って無いし。

外国だったら金がないから家に帰ることなんかできないぞ。

まあ、それよりも次の質問だ。

「それじゃあもう1つ聞くけどその背中についている羽は飾りか何かかな？」

「？この羽は飾りじゃないよ？私の羽だよ？」

おいおい冗談にもほどがある。

普通の人間には羽なんぞ生えてないものだがこの子は背中にある羽を本物という。

普段の俺なら冗談だろうっと一蹴するところなんだが、先程急にできた穴に落ちたため冗談とはいづらいところがある。

「もういい？それじゃあ私と遊んでくれる？」

「あ、ああ。どんな遊びをしたいんだい？」

フランドールが遊んでといってくるので俺はどんな遊びがいいのかを聞く。

「それじゃあねえ、人形遊びがしたいな。」

「ん？人形遊び？人形は何処にあるんだい？」

俺は部屋の周りを探すがそんなものは何処にもない。
そう思いフランドールに聞くのだが

「人形ならあるよ？目の前にね。」

フランドールの目の前には俺しかない。それをフランドールが言うって事は

「そう。あなたが人形の代わり。今度は長く遊びたいから中々壊れないで欲しいな。」

そういうと女の雰囲気からがらりと変わる。それはとても禍々しく狂気に満ちあふれていた。

「それじゃあ……遊ぼう？お兄ちゃん。」

そう笑ったフランドールの笑顔は酷く禍々しかった。

「あはははは！お兄ちゃん何処に逃げるの？もつと遊ぼうよ！！」

「だあゝ！何なんだよ本当に！なんであんな小さな女の子がこんな力を持っているんだ！」

フランドールから絶賛逃げている俺だがこれには理由がある。

それはフランドールが人形遊びと生じて俺を壊そうとするからだ。最初にこちらに勢いよく向かってくる手を嫌な予感がしたので避けてみたら丁度拳が壁の部分に当たってしまった。

怪我をさせてしまったかと心配したがそれは杞憂におわった。

なぜならフランドールの手が壁に触れた瞬間その壁が壊れてしまったからだ。

恐怖を覚えてしまった俺はそのまま逃げてしまったがそんな俺は悪

くないはず。

そしてそのまま鋼鉄の扉の前まで逃げたのだがそこから先は先程と同じでまったく開くことができずに、俺はその場に立ち尽くしてしまった。

「いかん！逃げ道が無くなってしまった。どうするよ？俺？」

後ろを振り向くとそこには羊の皮ならぬ女の子の皮を被った悪魔がいる。

普通の女の子はコンクリートっぽい壁をやすやすと砕くことはあるまい。

だからこそその訳なんだが

「さーお兄ちゃん逃げ道はもう無いわよ。おとなしく私の人形になってよね。」

「掴まって壊されるような人形にはなりたくねえよ！それよりなんでフランドールはそこまで力が強いんだ！？」

「何故って？それは私が吸血鬼だからだよ？お兄ちゃん」

「吸血鬼？それって御伽噺の話じゃなかったか？」

「実際にいるわよ？ほら？」

そういつてフランドールが唇の上をひっぱると歯の八重歯辺りに一際おおきな牙が左右に2本あった。

「納得した？それじゃあ、おとなしく私の人形になってね。」

まずい逃げ道もないし八方塞がりの状況だ。

「今度は逃げられないようにしてあげる。禁忌『フォーオブアカインド』」

そういうとフランドールが急に4人に分身した……って！分身！？

「「「これで、もう逃げ切ることにはできないわよ。お兄ちゃん」」」

4人が同じ事を言ってくるが俺は気が気じゃない。
こんなのが4人もいたらどう見ても人生終了である。
俺はこのままこの子の玩具にされて死んでしまうのだろうか。

「「「さあ、一緒に遊ぼう。」」」

フランドール達が一斉にこちらに向かってくるのを何とか逃げ切る……が、さすがに4人から逃げることなどできるわけも無く3人目の振り上げる拳に体があたってしまった。

「あああああああ！！！！！！！！！！」

そのまま俺は後ろの鋼鉄のドアに吹き飛ばされ背中を打ち付けられる。

「あああああ！！！！痛い！痛い！！！！痛い！！！！」

殴られたわき腹がありえないほど痛い！俺は生まれて始めて感じる激痛になす術も無くうずくまってしまう。

それに吹き飛ばされた際に頭を強く打ったのか垂れてきた血が目を

濡らす。

「「「お兄ちゃん。まだ壊れちゃ駄目だよ？もっと一緒に遊ぼう？」」」

俺の痛がる姿が嬉しいのかフランドールが満面の笑みを浮かべながらこちらにゆっくりと向かってくる。

「やばい……目の前が……暗くなってきた……」

フランドールがこちらに手を伸ばすのを最後に俺の意識は闇に消えてしまった。

――――
――――
――――

「あれ？俺なんでこんなところにいるんだ？」

あたりを見回すと目の前に大きな河があり、足元には無数の石がある。

どうやら俺は河岸にたっているみたいだ。

「何か凄い怖いことがあったような気がするんだけど……」

どうも意識が霞がかって思考が上手く働かない。

「しかし、綺麗な河だよな。」

目の前の河の水はとても清んでいて綺麗だった。

俺の家の周辺の河はゴミだらけでとてもじゃないが綺麗とは程遠い河だったので、余計にこの河が綺麗に見えてくる。

その河を何をするわけでもなく『ぼく』と眺めていると

「おや？こんな所に生きている人間が来るなんて珍しいね？あんた、ココで何をしているんだい？」

急に声をかけられて顔を向けてみると着物を着た髪をふたくくりにした着物姿の綺麗な女性がたっていた。

しかしながら一番の特徴はへんてこな鎌みたいな物とそのたわわに実った乳。

しょうがない………だって思春期ですもん。目を向けるなっと言う方が無理である。

巨乳………大好きです！！

しかしながらジッと見ているわけにもいかず

「あっと、綺麗な河なんですつと眺めていました。それでちょっと尋ねたいんですけどここは何処なんです？どうも意識がはっきりしなくて、ここに来る前の事を思い出せないんですよ。」

「その前にまずは自己紹介といこうか。あたしの名前は小野塚小町。知らない案内人さ。」

「あ、すみません。俺の名前は日野恭一っていいいます。よろしくお願いします。小野塚さん。」

相手が名乗ってくれたのでこちらにも名乗り返す。

「それで、ここが何処かって事だけど、簡潔に言うところは賽の河原だよ。俗に言うあの世とこの世の境目ってやつ。そんであたしは死んだ人をあの世に送り届ける水先案内人さ。」

ん？今何ていった？賽の河原って言わなかったか？って事は俺死んじまったの？

そこで、霞がかった意識が急にはっきりとしだす。

そうだ！俺はフランドールに殴られてそのまま意識を失ったんだっ
た！

あの時やられた痛みが……と体を見回すが何も痛いところは無く、
あんなに頭から血も出ていたのに今はまったく出ていない。

なら、ここに來たって事は俺やっぱ死んじまったのかな……。

「悲壮そうな顔をしているけど大丈夫だよ。あんたは死んでいない。
お前さんの後ろに紐のような物がみえるだろ？」

慌てて後ろを見るとそこには確かに紐のような物が腰の後ろあたり
から出ていた。

「はい。でていますけど、これ何ですか？」

「ああ、それは恭一の魂と肉体をつなぐ紐のようなものさ。それが
切れてしまったら死ぬことと同じになるから氣をつけたほうがいい
よ。」

「じゃあ、俺ってまだ生きていますか！？よかった！生きてて
良かったよ！！でもなんで生きてるのにこんなところにいるんで

す？」

生きているならこんな所に来ることはないだろう、と思い聞いてみたのだが

「たまに生きている人間がこちらの世界に迷い込んでしまうことがあるのさ。大抵の原因は重大な怪我を負ったとか重病になっているとか……とにかく共通していることは死にかけているって事だね。」

やっぱり俺、死に掛けているんだ。

「ど、どうすればいいですかね！？俺まだ死にたくないんですけど……！」

「状況が良く分からないから何ともいえないけど、大体生きて帰ることのできる人間は何かにつっぱられるって言うけど恭一はどんな感じだい？」

「いや、まったくそんな感じがしないんですけど。それよりか逆にあの河が三途の河だってわかっててもそちらの方に向かいたいって気持ちの方が段々強くなって行くんですけど。」

すると小野塚さんは数回首を横に振ると

「そりゃあ、駄目な兆候だね。そのまま行きたいって気持ちが強くなっちまうと魂についている紐がちぎれて死んじゃうよ。」

そりゃあ駄目ですがな！俺は生きて戻りたいんだけど、何か手段は無いのだろうか！？

そう思っていると急に体が引っ張られる感じがした。

「お？ おおおおお！ ！？ これか！ ？ この感じか！ ？ 何かに体が引っ張られる感じがする！」

「おお！ 良かったじゃないか。そのまま体に身を任せておけば無事に肉体に戻ることができるよ。」

「すみません！ 何から何までありがとうございます！！ 今度死ぬことになったら何かお礼をしますから！」

「あっはははは！ 死ぬことになったらって！ 面白いことをいうね！ じゃあ、その時を楽しみに待っているよ。」

そのまま体を引っ張る力が強くなり俺はその場所から飛ぶように後ろに引きづられていく。

最後にみた光景は小野塚さんとその後ろにいつのまにか現れた小さな女の子だった。

――――――――――

「は！」

目が覚めると慌てて体を起こす！

が急に体に痛みが走り、体を起こし続けることができず、すぐに横になってしまう。

「いでででで！！わき腹と頭が痛い！！」

よく体を見ると脇のほうには白い包帯がしてあり、頭の方も触ってみると包帯を巻いているのがわかった。

「ふう〜。何とか無事に生き返ることができたけど、俺はフランドールに殺されかけていたはず……………」

普通なら夢物語になるのだろうが、ここまで立て続けに色々なことが起こってしまったらもう信じるしかあるまい。

それに、臨死体験という貴重な体験をしたんだしな、死に掛けるつていのはあれだけど小野塚さんも綺麗な人だったし結果的にはいい経験をしたのかもしれない。

つとそんな事を考えている場合じゃない。

俺はベットに横になっており周りを見渡すとそこは俺が先ほどフランドールと一緒にいた部屋ではなく、ある程度の家具がそろった、何処かの客室のような部屋だった。

そのまま、辺りを見回しているとドアが少し開いており、そこから金色の髪が見えた。

「フランドール？」

俺の声にその金色の頭が『ビクッ』となるとそーとドアからフランドールの顔が見えてきた。

それに続いてフランドールと同じぐらいの背の見たことのない女の子の顔が見えた。

その子の顔はフランドールと、顔立ちがどことなく似通っているが

背中に生えている翼がフランドールのものと違い蝙蝠の翼のような形をしていた。

「ど、どうしたんだ、いったい」

知らない女の子よりもフランドールに殺されかけたので、フランドールの顔を見ると身構えてしまう。

怪我でベットの上から動けないのだが……

「あなたがフランドールの所にいた人間ね。その前にまずは自己紹介ね。私の名前はレミリア・スカーレット。ここにいるフ란の姉よ。」

「あ、よろしく。俺の名前は……」

「フランから聞いているわ。確か……京太郎だったかしら？」

「いや、恭一なんだけど……」

そこで流れる風が一陣。少しの間待っていると

「それで恭一、あなたの事なんだけど……」

あ、この子、無かったことにする気だ！

そう思ったのだが子供相手に指摘するのも可愛そうなので、そのまま流す。

俺は大人なのでその辺の配慮は持ち合わせているのだ。

「端的に言ってあなたはフランドールに殺されかけたわ。」

その言葉に後ろのフランドールが『ビクッ』っとなる

「それで、あと少しで死ぬって時にあの巫女と魔法使いがフランドールからあなたを助けたの。怪我とかの治療をしてあなたは今ここで寝ているの。」

その巫女と魔法使いに感謝である。もう、魔法使いって所にツッコミを入れたいのだが感謝の気持ちで一杯だからそんなことはどうでもいいのである。

「その巫女と魔法使いに、妹がかけた迷惑を謝罪して怪我が治るまであなたの面倒を見なさいって言われてここまで運んできたわ。」

もうその二人に感謝感激雨アラレ！である。

「それですは謝罪なんだけど、フラン。」

そうレミリアがいうと、今までずっとレミリアの後ろに隠れていたフランドールが恐る恐る顔をだす。

恐ろしいのは俺の方だったっつーんだけど、声には出さずにそのまま待っ。

「あの、その、壊しかけたりしてごめんなさい！久しぶりに見た人間だったからつい興奮しちゃって歯止めが利かなくなっちゃたの！もう二度としないから！！怪我とかさせてしまって本当にごめんなさいー！！」

そういつて泣き出すフランドール。

泣きたいのは怪我をして死に掛けた俺の方なんだがどうなんだろう？
その前に子供の泣き顔はえらく俺の心にグサグサと罪悪感と言う名の刃物が突き刺さってくる感じがする。

そして、目の前のもうひとりの子供、謝って泣いてんだから許してやれよっていう顔をするんじゃない。

そんなんではいはい許すことができたら世の中殺人犯だらけになってしまうわ。

そうこう考えていると、フランドールの泣き声がよいよい大きくなってきた。

その顔は涙と鼻水でグシャグシャになっており腕でぬぐってもぬぐっても涙が止まらないようだ。

「フランドール。こっちにおいで」

そう俺がフランドールを呼ぶとフランドールは泣きながらだが素直に近づいてくる。

こんなに泣いている子を怒るわけにもいかないよな………そう思い俺は右腕をあげる

「っ！」

フランドールは叩かれると思ったのかギュッと目を瞑り体を強張らせる。

俺はその上げた手をフランドールの頭に優しく置くと

「もういいよ。フランドール。一杯泣いて反省しているみたいだし、許してあげるよ。その代わり今度からは絶対にあんなことをしないでくれよ」

そう言ってフランドールの頭を優しく撫でる。

フランドールは最初顔をキョトンとさせていたが俺の笑っている顔と頭を撫でている感触が分かったのか泣いている顔を満面の笑みに浮かべると

「うん！わかった！次からは手加減をしてやるね！！」

と大きな声でいった。

そうじゃない……そうじゃないんだフランドール！俺はああいうことはやめて欲しいといったんだけど、その満面の笑みを見てしまったら何も言えなくなるじゃないか。

結局俺は何も言えずに、ただフランドールの頭を撫で続けたのだった。

「えへへへへ」

それとそこのお姉さん、俺がフランドールの頭を撫でているのをみて歯軋りしないで。

そんな、フランドールの満面の笑顔を見てこちらに歯をむき出しにして殺気を浴びせないで。

そんなぼそっと

「フランドールに手を出したら殺す」

て言わないで下さい。ただ頭を撫でているだけじゃないですか。

フランドールのが可愛いのは分かるからちよっと落ち着いてくださいな……あ、いま床が少し陥没した。

そんな感じで俺とフランドールの謝罪は終わったのだった。

――――

謝罪のあとフランドールとその姉レミアとはいったん別れて俺は怪我のためそのままベットに横になり安静にすることにした。

しかし、ベットの上でジツとしているのも退屈なもので俺は直ぐに飽きてしまった。

ああ、暇だなっと思っていると。

「失礼します」

といって銀髪の髪の女の人が入ってきた。

顔自体は恐ろしく綺麗な顔立ちをしているのだが一際存在感を佇ませているものがある。

それは女の人を着ている服であった。

それは、なんとメイド服である！生まれて生きていた中で始めてメイド服を着ている人を見てしまった！

漫画やゲームなどには度々出てくるのだが実際に着ている人は初めてなのである。

それに、実際の人間がメイド服などを着ていると違和感を感じるものだが、目の前の人はそのような感じはまったくせずメイド服がよく似合っていた。

「お食事をお持ちいたしました。」

「あ、すみません。ありがとうございます。」

そうやって料理の乗ったカートのような物を押して部屋に入ってく

る。

そのまま俺のベットの前までくると、病院なのでよく見かけるベットの土におくテーブルのような物を俺の目の前に置いてその上に食事を並べていく。

内容は肉料理やスープ、サラダなどの洋食が中心のメニューだった。その料理を全て並べ終わると

「それでは準備が済みましたので失礼します。食事が終わったらテーブルを脇の方に寄せていてください。後で下げに来ますので。」

「あ、すみません。何から何までありがとうございます。」

そうやって頭を下げる。

「いえ、お気になさらないでください。では、失礼します。」

そうやって銀色の髪のメイドさんは何も乗っていないカートを押して部屋から出て行った。

「しまった。名前を聞いておけばよかった。」

そう思ったが、ここにいる以上また会うこともあるだろうと思い、一先ずは目の前のご飯に取り掛かるほうが先決だ。今の今で何も食べていなかったので俺の腹は目の前の料理を見て盛大に鳴っていた。

「いただきますーす！」

まずは肉からっと思いい一口食べてみると

「旨い！旨すぎるー！！」

それはとても美味しく俺は一心不乱に目の前の料理を片付けるのだ
った。

そしてその後、全てのご飯を平らげた俺は満腹のため眠くなってし
まい行儀が悪いと思いつつも食器もそのままにベットに横になる。
目を瞑ると直ぐに睡魔が襲ってきて俺はそのまま眠るのだった。

第1話 穴から落ちた世界は見知らぬ場所（後書き）

どうも。ジャックランタンです。多くの幻想郷の作品を見て自身も書きたいと思い今回投稿させていただきました。つたない文章ですが生暖かい目で見守ってくれたら幸いです。

第2話 何とか住む場所を確保しました（前書き）

続けて第2話投稿です。原作の話はある程度まとめて書いてます。

第2話 何とか住む場所を確保しました

「くああああ！よく寝た」

俺は眠りから覚めるとベットから体を起こす。

「あれ？ここ何処だっけ？」

ぼんやりする意識のなか周りを見回すとそこは俺の部屋ではなく見たことのない部屋だった。

「ああ！そういえば俺、ぜんぜん知らないところに来たんだっけ！」

昨日の夕方に学校から帰る途中に急にできた穴に落ちて俺はまったく知らないところに来たんだった。そして色々あってここで寝てるんだった。

「わき腹は……………良しっ！」

昨日とある理由でわき腹を傷つけていたのだが思ったよりも酷い怪我ではなく伸びをしても痛くはないのでそのままベットから起き上がる。

ちなみに昨日目の前にあったテーブルは食器ごといつの間にか片付けられていた。

「一先ずは昨日のお礼を言い to フランドールの親御さんに挨拶しなきゃな」

怪我を負ったのはフランドールのせいだが、色々と見ず知らずの俺

をここに置いてくれて食事まで出してくれるのだからお礼を言うに越したことはないっと思いい先ずは部屋から出る。

「しかし、長い廊下だな。」

部屋を出てひとしきり目の前の廊下を歩いているのだが普通の家より大分長い廊下を歩いて誰かいないか探していた。

そうこうしていると目の前に昨日知り合ったフレンドールがいた。

「よ！フレンドール、おはよう！」

「あ！恭一！おはよう！！」

こちらに気づくとフレンドールは笑顔でやってくる。

「もう怪我は大丈夫なの？」

「ああ、軽い怪我みたいだったし大丈夫だよ。そんなに心配しなくてもいいよ。」

自分や負わせたせいかフレンドールは心配そうな顔でこちらを覗く。しかし、怪我自体もたいしたことはなかったのでもう大丈夫っとうことで笑顔を見せる。

「ほんと？よかった。それで、恭一はどうしてこんな所にいるの？何か用事？」

「ああ、そうなんだよ。フレンドールのお父さんかお母さんは今いる？会って話がしたいんだけど。」

「パパとママ？いないよ」

あいにくの留守なのか。それじゃあいつぐらいに帰ってくるのか聞かないとな

「それじゃあ、いつぐらいに帰ってくるとか分かるか？」

「その前にここの館にはパパとママはいないよ。私が物心付いた頃からあっていないもん。」

うーむ。何か重い話のような気がしてきた。ここは話を変えるべきか？

「それじゃあ、昨日フレンドールと一緒にいたお姉さん何処にいますかわかるか？」

「お姉さまのいるところ？だったら分かるよ！」

そういつてフレンドールはこっちに手を差し出す。

「？」

「手、案内してあげるから手をつなご！」

その子供らしい姿に微笑ましく感じ、フレンドールの手をとる。

「じゃあ、連れて行ってくれ。フレンドール。」

「ん！分かった！それに私のことはフランでいいよ！フレンドールだと長くて呼びにくいでしょ。」

「じゃあ、フランって呼ぶことにするよ」

「うん！」

フランと手を繋いで俺はそのままレミリアのところまで案内してもらった。

――――――――――

「此処がお姉さまのいるところだよ」

先ほどまでご機嫌の様子で繋いだ手を上下に振っていたフランだったがレミリアのいる部屋に近づいていくと段々元気がなくなっている様子だった。

「ここがお姉さまのお部屋だよ恭一」

「お、ありがとうフラン案内してくれて」

ある部屋の前に来るとフランはその前に止まった。

「それじゃあ、またあとでね」

「あれ？フランも一緒に行かないのか？」

フランも一緒にくるものだと思い聞いたのだが

「ううん、私はいいや。それじゃあ、恭一。またあとでね。」

そういつてフランは手をこちらに振るとそのまま廊下の影に消えて行ってしまった。

「どうしたんだ？フランのやつ。何だか悲しそうな顔をしていたけど」

そう思ったがまた後で会うだろうと思い、とりあえずは目の前のドアをノックする。

『コンコン』

「開いているわよ。中に入りなさい」

そう中から声が聞こえてくるが相手が誰だか分かるのだろうか？
そう疑問に思ったのだが入ってもいいという事なのでそのまま中に入らせていただく。

「よく来たわね、人間。ようこそこの紅魔館へ。」

中に入るとフランの姉のレミリアが豪華な椅子に座っており、その傍らに昨日食事を運んでくれたメイドさんがいた。

「あ、昨日はどうもありがとうございました。それと初めまして、

俺の名前は日野恭一といいます。」

「これは、ご丁寧にどうも。私はこのメイド長を務めさせていた
だいている十六夜 咲夜と申します。以後お見知りおきを」

そういつて頭を下げる姿はどこか清廉された動作に思えた。一瞬呆
けていたが俺も慌てて頭を下げる。

「こちらこそ、よろしく願います。」

「そして私はレミリア・スカーレットよ。この紅魔館を統べる者に
して偉大なる吸血鬼の一族に連なるものよ。」

フランも自分が吸血鬼だと言っていたのだが吸血鬼って本当にいた
んだな。

「あんまり驚いていないようだけど、本当に吸血鬼だと信じている
の？」

「ああ。さすがにフランの力を見せられたらな。力も強いし終いに
は4人に分身したし。これで信じないほうがおかしいだろう？」

実際に分身は吸血鬼の力というのはどうかと思うのだが素手で壁を
壊す力などをみるとさすがに信じないわけにはいかないだろう。

「まあ、いいわ。それよりお前に聞きたいことがあるのだけど、昨
日はどうやってフランの部屋に入ることができたの？あそこは鋼鉄
製のドアで塞いでいて誰も中に入ることができないようにしていた
のに。」

「ああ、そのことか。それは昨日の夕方……………」

俺は昨日起こったことを説明していく。

「へえ、それは興味深いわね。まあ、穴をだした奴には心辺りがあるのだけど、多分そいつの仕業でしょうね。」

「知っているなら教えて欲しいんだけど。俺も早く家に帰りたいし。」

「それは多分無理でしょうね。あなた此処がどこだか分かる？」

「紅魔館って所なんだろう？」

「いいえ、そうじゃないわ。ここが何処の地名なのか分かる？」

俺は少し考えて

「いいや、まったく分からない。此処が何処だか教えてくれると助かる」

「此処は幻想郷というの。妖怪と人間が暮らしている一種の樂園とあったところね。そしてこの世界は結界に包まれていて他の人には見ることのできない世界。それが幻想郷なの。かくいう私も最近ここに来たばかりなんだけど。」

おいおい、吸血鬼の次は妖怪かよ。

しかもこの世界からは周りから見ることをできない所だときた。もう俺の常識を覆す話が多すぎて理解することが困難になってきた。もともと俺の頭はそこまで良くないのであまり深く考えることはな

いのだ。

「あんまりよくは分からないけど要は此処は他の世界とは離れた、一種の異世界みたいな感じということでもいいんだろ？」

「まあ、そう捕らえてもらってもかまわないと思うわ。もっとも私が創ったわけじゃないからそこまで偉そうな事は言えないんだけどね。」

レミリアは一度、自分の横のテーブルにおいてあるグラスを取るとその中身を飲み干す。

「だいたいこの世界のことは分かった？あなたが元の世界に帰りたと思うのならこの世界を創った奴にあうかそれともあの巫女に会うかのどちらかね。」

巫女？昨日も巫女の話が出たがそれはいったい誰なんだろう？

「なあレミリア、その巫女っていったい誰なんだ？」

「気安く私の名前を言ってくれるわね。人間。」

俺がレミリアと言った瞬間レミリアからものすごい殺気が溢れてきた。

俺はそれにまったく対処することができずに脂汗を凄い勢いでかきはじめた。

しかし、その圧力も直ぐに収まった。

「まあ、フランの件もあるし多めに見てあげるわ。それでその巫女の話なんだけど話すと長くなるわよ。」

助かった。そう思い額のかいいた汗を拭ってそう言ってくるレミリアに返事を返す。

「どうせ、どこに行けばいいのか分からないんだから話を聞くよ。それにその巫女に会えば外に出ることができるのかも知れないんだろ？ だったら話を聞いたほうがいいと俺は思う。」

「まあ、いいわ。本当はあまり話したくないんだけど教えてあげる。あれは……………」

レミリアの話をきいて分かったのだが、最近になってレミリアはこの幻想郷に来たらしく、その目的はこの幻想郷を乗っ取ろうという考えで来たそう。

それで手始めに里の人間……………この幻想郷には人の里があるらしい。まあ、その人間の血を吸って襲っていたらしいのだが、あるとき二人の少女がその解決にのりだしたそう。

その二人がレミリアの言う巫女と魔法使いなのだが、とにかくその二人は最終的にレミリアたち紅魔館の連中を根こそぎ倒して……………レミリアも例外じゃなく倒された。

それで事件は解決と思いきや地下から大きな音がしてその二人がレミリアを倒したあと地下に行くところには鋼鉄製のドアがありその扉の向こうから俺の悲鳴が聞こえてきたので力づくで扉を破壊。↑ここ重要。

して中に入ったところ俺は頭から血を流して気を失っており、そばにはフランが狂ったように笑っていたので俺を助けるため狂ったフランと戦い、何とか勝つことができ、俺は助かったと。

ここまで聞くと1つの物語が書けそうな気がするのは俺の気のせいだろうか？

「それが、その巫女と魔法使ってわけだ。何だか話しに聞くとんでもない化け物みたいだな。極太のレーザーを出すとか、吸血鬼相手に勝つことができるのか。」

その際の戦いは弾幕ごつこというやり方で勝負を決めるらしい。実際に見たことはないのだからないのだが、要は弾をだして相手を地面に落とした方が勝ちらしい。

その他にもスペルカードといった必殺技みたいなものもあるという聞くからに、物騒な感じなのだが基本的に殺す事や相手が動けなくなるほどの攻撃はしてはいけないというのが最低限のルールなそうなの。

「それに私は運命を操る程度の能力を持っているにも関わらずあの巫女はそれをどういうわけか跳ね除けて私に勝ったのよ。理不尽にも程があるわ。」

そうレミリアが言ったように、ここの妖怪などはたまに特殊能力を使うことができるらしい。

例えば、レミリアなら『運命を操る程度の能力』隣にいる咲夜さんなら『時間を止めることのできる程度の能力』みたいにそれぞれ持っている。

これにはさすがに半信半疑だったのだが実際に咲夜さんが時間を止めて俺の横に現れた時などは納得するしかなかった。

だって、今までレミリアの隣にいた咲夜さんが急に俺の横に現れたんだから信じるしかないだろう。

それに首筋にナイフを突きつけられた時には本当に焦った！
顔に似合わず怖いことをする人だと思った瞬間だった。

「それじゃあ、フランの能力は何なんだ？」

この二人が持つてるならフランも持っているはず。そう思い聞いた

のだが

「あの子の能力は私たちとは桁が違うわ。あの子の能力は『ありとあらゆるものを壊すことのできる程度の能力』なの。あの子自身自分の能力を未だに上手く制御することができずに時折あのように暴走してしまうの。だから今まであのこが生まれてから495年間館の地下に監禁していたわ。あの子自身が自分の能力を制御することが出来るまでね。それが巫女たちが扉を壊したからあの子は外に出ることになったの。これから先どうなるかは分からないけどこれが1つの切っ掛けだと思ってフランを外に出すことにしたわ。」

あんな、殺風景な部屋に1人でいたのはそんな理由があったのか。しかし495年てのは長生きの吸血鬼からしたら短い時間なのかもしれないがそんな時間をあの薄暗い地下に1人でいたのならさぞかし寂しかったのだろうと思う。

だから、俺が目の前に現れた時にあんなに嬉しそうな顔をしていたんだろうなと思う。

それにレミリア自身、フランを地下室に監禁しているといったずいぶん酷いことをしているように思えるが本当はしたくなかったのだということがよく分かった。

フランの話をする時など顔を辛そうにして話すし、何より昨日の妹に対して過保護の面もあり妹のことを溺愛しているように思えたかな。

フランのほうは自分の姉に嫌われていると思っていらっしゃるけどもまだレミリアの近くに行くのは抵抗があるみたいな感じだったしな。でも昨日はレミリアの影に隠れてこちらを見ていたぐらいなんだから本心ではレミリアのことは好きなんだろう。

でも、今まで会わなかった分どう接して行けばいいのか分からない様子だったな。

「さっき、フランに会ったが嬉しそうに廊下を歩いてたぞ。色々なものが珍しいのか歩く度に色々なものを眺めていたぞ。」

「フランにあったの？」

「ああ、レミリアが何処にいるのか分からなかったんで適当にぶらしていたらフランにあったな、それでフランにレミリアの事を聞いたら此処まで案内してくれたんだ。」

「そう……あなたに懐いているのね。私にはそんな嬉しそうな姿なんてまったく見せなかったわ。」

「それはまだどう接していけばいいか分からないだけなんじゃないか？フランも俺と別れるときレミリアのいる部屋を見て寂しそうな顔をしていたからな。その内慣れてきたら笑顔も見せてくれると思うぞ。」

「それを聞いて少し安心したわ。それで、そんなあなたにお願いがあるんだけど」

ん？何だ？

「あなたにはこの館でフランの教育係をやって欲しいの。あの子は495歳といってもずっと地下にいたわけだからまだ精神が子供のままなの。それに急に外に出たからか情緒不安定でいつまた狂うかわからないわ。だから、今フランが最も懐いているあなたならフランも言うことを聞いてくれるかもしれない。」

「どうなんだろうな？確かに懐いてくれているような感じはするけど、もし何かの拍子に狂ったりしたら俺じゃあフランは止められない

いぞ。いいように嬲られて殺されるだけだと思う。」

「それは大丈夫だと思うわ。私の能力があなたなら大丈夫だと言っている。だからあなたに頼むの。それにこれはレミリア・スカーレットとしてではなく1人の姉として頼んでいるの。受けてくれないかしら？」

そういわれるとこっちも辛い。

この姉妹の壊れた絆を直してあげたいと思ってはいる、何より家族は仲良くってのが俺の持論だ。

それに今は何処とも知らない世界にいるんだし、ここは引き受けてもいいのかも知れない。

「条件があるんだけどいいか？」

「何？言ってみなさい。できうる限りのことはしてあげるわ。」

「まず1つはフ란の教育係をやる以上俺を此処に置いて欲しいということ。俺自身も置いてもらうならフ란の教育係の他にできる事はする。行く当ても無くどうやってもこの世界に帰ればいいかわからない状況だと、食べ物食べれて眠れるところが欲しいからな。それが交換条件ってことでどうだろう？」

「それぐらいなら、全然問題ないわ。むしろこっちから此処に住んで頼むぐらいよ。それじゃあこれからよろしく恭一。」

「よろしくお願いいたします。恭一様。」

ここでレミリアと今までレミリアの隣におりまったく言葉を出さなかった十六夜さんが口を開いている。

「ああ、こっちもよろしく、レミリア。十六夜さん。」

これが俺の幻想郷に来た始まり。

そしてこれから先ずっと続く幻想郷の面白可笑しい日々の始まりでもあったが、この時はまだ知る由もなかった。

第2話 何とか住む場所を確保しました（後書き）

主人公、教育係になるの話でした。しかし、ただの人間が吸血鬼のお嬢さん相手にやっていけるだろうか？

第3話 戦慄！図書館に潜む恐怖の本（前書き）

今回はパチュリーと小悪魔さん登場の回です。
そして、ヤンデレ怖いのです。

第3話 戦慄！図書館に潜む恐怖の本

「くあゝ！今日も元気におはようございますっ！」

眠りから覚めてベットから降りる。そしていつものように洗面台に顔を洗おうと向かおうとするところで

「そういえば此処は俺の家じゃなかったな。」

あの後フランの教育係を受けた後どうやって教えていこうか一日中考えていて気づいたら眠っていて朝になったんだった。

「約束通り今日からフランの教育係をしましょうかね。」

一先ず顔を洗いに洗面台まで向かい身支度を整えてフランの所に向かう。

ちなみに現在は朝の8時。

吸血鬼なのに日中を過ごすってどうよ？と思ったが起きているものは起きているので深く考えないことにする。

「さゝてフランは起きているかね〜」

部屋を出てから長い廊下をのんびりと歩いていると目的のフランの部屋が見つかった。

フランも地下室が壊された事が切っ掛けで外に出ることができたので、今は別の部屋に寝ている。

一応部屋をノックして

「おゝい！フラン起きてるか〜？」

少し待っても返事は無く俺は悪いとは思ったが起こすために部屋に入る。

「お邪魔します……………」

無断で他人の部屋に入る時ってなぜか小声になるよね？

そんな、くだらない事を考えながら部屋の中に入る。

すると予想のごとくフランが部屋の奥にあるベットですやすやと気持ちよさそうに寝ていた。

俺はフランが寝ているベットの前まで行くと

「おい！フラン！朝だぞー！！起きろ起きろーい！！」

声を出して体を揺るも中々起きない。

しょうがないので今度はフランの頬っぺたを突付いてみる。

『ぷにぷに』

おお！非常にやわらかい頬っぺたをしているじゃありませんか！

子供の肌って柔らかくて気持ちいいんだよね。

そう思って突付いていると

「うーん」

フランの眉がゆがんで

「『がし！』はぐ！」

頬をつついていいる俺の指を掴むとそのまま口の中に含んでしまった。

「うお！これはいかんでしよう！何か他人が見たらえらくヤバイ気がする！！」

今の光景を誰かに見られたら俺は多分ロリコンの称号を与えられるだろう。

寝ている女の子に指を吸われているなんて犯罪以外の何物でもない気がする。

「フラン！急いで！急いで指を口から離して！そうしないと俺、捕まっちゃいそうだから！！」

「わふあひのふおふおをひゅひゅいふあびゃちゅびゃびよ！！（私の頬をつついた罰だよ！！）」

こいつ……起きてやがる！今までは狸寝入りでもしていたのか！？それよりなんで口にいれるんだよ！？おかしくない！？

「フラン！この光景は非常にやばいんだ！何がやばいって俺の命が危ない気がするじゃない！！」

何故かは分からないが、このままでいると危険なような気がするが
ランの口から懸命に指を離そうとするが

「むゝ！」

負けじとさらに吸い付いてくる。

フランさん！そんなに指を啜えてどうしたいのさ！？

『がり！』

「痛え！フラン！指を噛むな！血が出る……………血!？」

フランは俺の指を噛み切ってそこから出た血をおいしそうに飲んでいる。

「おいおい！血を飲まれたら俺も吸血鬼になるんじゃないか!？」

俺が叫ぶとフランは一旦指から口を離して

「大丈夫。こっちから血を送らない限り吸血鬼になる事はないよ。だからもっと頂戴」

そういつて再び俺の指に吸い付き血を飲むフラン。

おお！よかった！吸血鬼にはならずにすんだ……………いや！それも嬉しいけどいい加減指に吸い付くのはやめて欲しい！何だか直ぐそこまで死の危険が忍び寄っている気がする。

「はっ!!殺気!？」

「何なの？朝から騒々しいわね。あれ？確かここはフランの部屋だったはず……………」

ドアの方を覗いてみるとそこには騒音の原因を探りに来たレミリアと目があった。

「まずい……………これは非常にまずくないですか!？」

昨日、フランが謝った後に俺がフランの頭を撫でていると、俺にか聞こえない声でぼそっと

「フランに手を出したら殺す」

って言ってた気がする。

俺はロリコンではないのでフランに手を出すことは無いのだが、この光景を見る限りではどう見てもいいようには捕らえられない感じがする！

「あの、レミリアさん？これはですね……………」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す……………」

「……………フラン？指を離してね……………じゃないと巻き込まれるから。」

「うん」

こういう時だけは素直に離すフラン。

最初から素直に離してくれるとありがたかったんだが……………もう遅い。

「グッバイ！フラン！！」

俺はフランに人生で一番いい笑顔を向けると、受刑者のような気持ちでレミリアの方に向かったのだった。

「てててて！何とか生き残る事ができた。でも、もう少しで二度目の三途の河を見るところだった」

レミリアの前に辿り着く前に大きな光の弾の大群によって弾き飛ばされた俺は、そのまま地面に落ちて気をう失ったらしい。

そして俺の体に放たれたのは弾幕といって、弾幕ごつこの際に用いる攻撃手段なので死ぬことはないのだふが、中ると結構痛い。それが大量となると気絶するのも当然だと思う。

「お姉さま、凄く怖そうな顔をしてたね。」

「あれは、鬼だよな。吸血鬼って西洋の鬼って言うぐらいだし言葉どおりかもしれないけど。」

咲夜さんが偶然通りがかって止めてくれなかったら俺はそのまま死んでいたかもしれない。

最後の方なんて直接俺の首を絞めていたもんな。

いやはや、マジで死ぬところだった。

しかし、気を失う前にレミリアを後ろから抱きとめる咲夜さんを見た時、鼻から鼻血を出して嬉しそうにしていたけど………まあ気のせいだな！あんな綺麗な人がおいそれと鼻血を出すわけないもんない！ちなみに何で咲夜さんと呼んでいるかというと、昨日の夜、フランスの教育係を受けた時に自分の事は咲夜でいいと言ってくれた。どうも苗字で言われるのが慣れていないらしい。

別に断る理由もないので今は咲夜さんと呼ばせてもらっている。

「よし！痛みも大分おさまったし、今から図書館に向かうぞ！」

「おー！」

気絶した俺はそのまま部屋に放置されて、レミリア事が済んだらさっさと何処かに行き、咲夜さんはそれに付いて行った。

フランだけは俺が起きるまで居てくれて、起きた時に怪我也負っていたので痛みが引くまで待ち、痛みもおさまったので行動に移すことにする。

「今日は図書館で何をするの？」

俺と繋いだ手をゆらしながらフランが尋ねてくる。

最初は二人で並んで歩いていたんだがフランは急に俺の手をとるとそのまま繋いでゆらゆらと揺らしながら歩いていく。
顔を見ると楽しそうにしている。

やる事がとにかく子供っぽく、手を繋いだのも今まで薄暗い地下室にずっといたので人の温もりが恋しいのかも知れない……繋いだ手を見ながらそんなことを考える。

でも今は地下室から外に出ることができたんだし色々楽しいことも教えていきたいと思っている。

まあ、ちゃんと勉強とかも教えていけないだろうけど。

そんな事を考えているとフランがこちらの顔をジッと見ている。あ、質問に答えてなかったな、

「っと、悪い悪い。色々考え事をしてた。今日は図書館で読書だな。フランの部屋にいっぱい絵本があったから今日は図書館で絵本を見ながらすごそうか？」

「やった！！わたし絵本を見るの大好きだよ！」

嬉しいのか繋いだ手をぶんぶん振ってはしゃぐフラン。

そしてぶんぶん上下に振られる俺。
フランの力が強く俺は腕だけではなく体ごと上下にふられているのだ。

「フ、フラン！体が！体が上下にゆれてる！ちょっと落ち着こう！そうしないと俺の腕がこのままではとれてしまう！！」

握られたての方が振られるたびにミチミチと嫌な音を立てておりこのままでは取れてしまいそうなほどの痛みを感じてくる。
俺はあわててフランを落ち着かせる。

「ごめんなさい。嬉しくてついハシャイジャッタ。ちょっとおとなしくするね。」

フラン的には腕を振っているつもりなのだろうが力があまりにも強すぎるため俺の体ごと振ってしまうことになるのだ。
恐るべきかな吸血鬼の力。

「嬉しい気持ちも分かるけど、少し落ち着かないとまた能力が暴走するかもしれないしな。」

フランは気持ちが高ぶってしまうと何かを壊してしまう気持ちが強くなるそう。

だから心を落ち着かせる事も一緒に覚えさせていかないといけない。

「まあ、落ち着いた事だしなかに入るぞ。」

「うん」

扉を開けると、目に飛び込んできたのは見上げるぐらいの大きさの

本棚とそれに収まっている本。

それらが無数に置かれてあり、大きな町の図書館でもこのような大きさは無いだろうと思えるほどの光景だった。

「おおー！ すごい！ これ全部本ってか？」

「凄いねー！ 本が一杯だよ！！」

二人で中に入り、その本の多さに圧倒される。

どこをみても本、本、本。見渡す限り本と本棚で一杯である。

「あら？ あなた誰かしら？」

フランと二人で見回していたのだがそこに女の子の声が急に聞こえてきた。

その方向を向くと、そこにはネグリジェっぽいゆったりとした服をきた女の子と、そのすぐ後ろにメガネをかけた司書っぽい服装の女の子がいた。

特筆すべきは、その女の子の背中には黒っぽい翼がはえていた事だろう。

「ここは私の図書館よ？ そんな所に許可も無しで入ってくるあなたは誰なのかしら？」

「ああ、これは悪かった。俺の名前は日野 恭一。よろしく。ええっと」

「パチュリー。パチュリー・ノーレッジよ。」

「私の名前は小悪魔といいます。」

ネグリジェを着た女の子がパチュリー、後ろの司書の格好をした人が小悪魔さんらしい。

「私の名前はフランドール！よろしくね！」

するとパチュリーが意外そうな顔で

「ああ、あなたがレミリアの妹のフランドールなの？地下にいて聞いてたけど出てきたのね。」

「よろしくお願いします。妹様」

お互い挨拶をして

「それでここに来た理由だけどフランに本を見せようって事でレミリアに言ったら、この館には図書館があるからそこに行きなさいって言われたんだ。それで、ここに来たわけ。」

「そうだったの。レミリアが許可を出したのなら別にいいわ。その代わりあまりあれそれと本をとったら危ないわよ？」

「危ない？どうして？」

本が崩れるといった意味で危ないのだろうか？ここは本が一杯あるので本棚の高さも結構ある。

それが崩れたら確かに危険そうだけど

「ここには魔道書も置いてあるから、強力な物だとあなたの精神を破壊してしまう物や乗っ取ってしまう物など様々な物があるからあ

まり無闇に触らないことね。」

そいつは怖い事を聞いた。

俺は話を聞きながら何気なく取っていた本を怖くなってゆっくりと棚に戻した。

「奥の方に行かなければそこまで危険な物はないわ。だから、安心していいわよ。」

「そう言われて安心したよ。どの本が危険かまったく解らないから聞けてよかったよ。」

奥の方に行かなければ特に問題はないだろう。

「ちなみに私はレミリアの友人よ。それで此処に住まわせてもらってるの。」

「へえー。レミリアの友達か。それじゃあ」

「いえ、私は吸血鬼じゃないわ。そう言っても人間でもないけどね。俗にいう魔女ね。」

吸血鬼の次は魔女か。

「そして後ろにいるのは私の使い魔。背中に翼がはえているでしょ？」

確かに翼が生えている。会った時から非常に気になっていた。

「私は魔族です。といってもそこまで力は強くないんですけどね。」

これからよろしく願います。恭一さん」

おお！雰囲気やわらかい感じの人で安心した。

「恭一！早く絵本を見ようよ！」

俺たちの会話に退屈したのか、フランが俺の袖を引っ張って急かしてくる。

「ああ、ごめん。待たせて悪かったな。それじゃあ、色々教えてくれてありがとう。パチュリー、小悪魔さん」

「別にいいわよ。それじゃあ、恭一」

「また、お会いしましょう恭一さん」

そういつて二人は図書館の奥の方に向かっていった。

「さーて、待たせたなフラン！それじゃあ、絵本を探そうか？」

「うん！」

そして俺たちは絵本を探すため図書館の本棚に、改めて向かって行った。

――――――――――

それぞれ本棚に向かってどの絵本がいいかを選ぶ。

俺は子供向けの本を探して色々な絵本をとってみる。
しかしながら本の題名を見てみると

『ヤンデレラ』

『切り裂きジャックと豆の木』

『人肉姫』

『赤スキン』

など、普通の絵本とは違った内容の本があった。

特に人肉姫などは名前自体が不気味でどうなっているのか良くわからない。

試しに一番最初にとったヤンデレラを見てみたのだが

「あかん。これは駄目かもしれん」

思わず関西弁になるほど子供には見せられない内容だった。

「途中まではシンデレラと似てたけど結婚してからのヤンデレラの怖さは恐れ入ったね。」

そう、普通のシンデレラなら王子と結婚してハッピーエンドで終わるのだが、ヤンデレラの方はまだ続きがあった。

結婚した後、最初は幸せに暮らすのだが元々平民のヤンデレラは王子にいつか捨てられるんじゃないかと思うようになり、ある日料理の中に眠り薬を混ぜて王子に食べさせる。

その料理を食べた王子は当然寝てしまい、王子が起きるとそこはヤンデレラの部屋。

不思議に思いながらも体を起こそうとするが起き上がることがまったくできない。

よく体を見てみると両手足ともベットに縄で括り付けられている状態だった。

声をあげて助けを求めるとそこにヤンデレラが現れた。

王子はヤンデレラに助けを求めるとヤンデレラは俯いて何も言葉を発しない。

不振に思った王子だがそれでも目の前にはヤンデレラしかいないので続けて懸命にヤンデレラに声をかけるとやっと顔を上げるヤンデレラ。

顔を上げたヤンデレラの顔はいつも見る美しい顔ではなく、虚ろな目をして、口は半開き、開いた口からは涎が垂れてブツブツと何かを呟くばかり、正に狂人の顔であった。

さすがに王子も異変に気づき別の者に助けを求め声を出すが一向に現れる気配はない。

そしてヤンデレラの呟きが急に止まると、にたあつと顔を笑みの形に持っていく。

そして右手に何かを持って引きずるような足取りでこちらに向かってくる。

王子はその右手をよく見てみるとその物は鈍い光を放っており、どうやらナイフの類のようだった。

それに気づいた王子はますます声をあげてヤンデレラを止めようと叫ぶがヤンデレラの歩みは止まることはない。

そのまま歩み続け、王子の枕元にヤンデレラが立つと口を開けて狂ったように笑い出し、頭を掻き毟る。

頭から血が出ても掻くのをやめないヤンデレラは終に顔中血だらけになってしまう。

そしておもむろにナイフを持った手を振り上げて王子の顔に叩きつけようとするヤンデレラ。

王子が最後に見た光景は迫ってくるナイフと顔中血だらけのヤンデレラと、さらに血よりも紅い血走ったヤンデレラの目だった……………。

『パタン』

俺は静かに本を閉じるとそのまま本棚に直そうとするが本が震えて上手く直すことができない。

実際に震えているのは本じゃなくて俺の腕なんだが、というよりも全身が震えているような気がする。

「ヤンデレ怖いよヤンデレ！もうトラウマに発展しそうだよこの絵本！」

子供には絶対に見せらんないでしょ！これ書いた奴、頭がおかしいんじゃないの！？

他にも開けて見たのだが全部が全部似たような内容だった。

『切り裂きジャックと豆の木』は豆の木の物珍しさに来た人をジャックが切り裂いていく話で、

人肉姫は人間になった人魚姫が最後に王子と分かれる際に贈りものと行って自分の肉を食べさせる話。

赤スキンは殺人鬼の赤頭巾の女が人を殺す際に浴びる血で肌が真っ赤になる話だった。

どれもこれもが救いような話がある。

他にも多くあったがどれもこれもが似たような内容だった。

「どうするか？さすがにフランにこんな絵本は見せたくないし。」

どうするか？っと考えていると

「恭一！これ読んで！」

フランが一冊の本を持ってやってきた。

それがまともな本であって欲しいと願いつつ俺はその本をフランから受け取り、表紙を見てみる。

『ドラキュラ』

………よりにもよってこれか。

ご丁寧なことに表紙に写っているドラキュラが子供向けのように可愛らしくアレンジされていた。

「あれか？フランやレミリアが吸血鬼だからこんな本があるってか？」

考えても始まらないので、この本がまともであって欲しいと願いつつフランと一緒に本を読むために机のある椅子に座る。

フランは隣の椅子に座ると思いきや俺の膝の上に座った。

「えへへへ」

上からフランの顔を覗いてみると、地面についていない足をブラブラさせて楽しそうに笑っていた。

まあ、相手は子供だし、そこまで考えることも無いか………。

フランも嬉しそうにしているのでそのまま俺は本をとって中身をあけて読んでいく。

結局、ドラキュラの話は思ったよりも、まともな内容だった。

吸血鬼のお姫様が悪い人間にさらわれてしまい、別の国の吸血鬼の王子がそのお姫様を助けるといった内容で、最後はその人間を倒して二人は結ばれるといった話でハッピーエンドで終わるのだった。

読み終えた後はフランの目はキラキラとしておりとても満足そうな顔をしていたのでよかったと思う。

俺はというと

「やばい。凄くまともな本だった。さっき見た本が異常すぎて人間が悪役の所なんてどうでもいいと思えるほどいい本だった。」

きつと先ほどの本が異常すぎたのだろう。

そう思いながら、読んだ本を直して新たに読む本を探すため椅子から立ち上がった俺とフランだった。

……ちなみにあの後、吸血戦隊ドラレンジャーやキュラエモン（そこドラでよくない！？）などがあり、特にドラレンジャーは5城合体キングドラキュライザーと言った巨大メカが出てきており今度個人的に読んで見ようと思った。

第3話 戦慄! 図書館に潜む恐怖の本(後書き)

作者はヤンデレは好きなのですが、それは漫画やアニメだけの話で、実際にやられると確実に怖くなり逃げ出してしまおうと思います。だって監禁とか拘束とか実際にやられたら………怖くて想像もできません。

第4話 箒に乗った女の子。そして連れ去られていく本たち（前書き）

今回は魔理沙登場の回です。

魔理沙は言葉遣いが難しいので少し違和感を感じるかも知れませんがそこは頑張って直して行きたいと思います。

第4話 箒に乗った女の子。そして連れ去られていく本たち

フランと一緒に絵本を読んでいると急に

『ドガシャーン!!』

という音と共に部屋の窓ガラスが割れて箒に乗った金髪のいかにも魔女です!といった感じの服装の女の子が入ってきた。

「おーっす!! 本を昨日の約束どおり本を借りに来たぜー!!」

地面に降り立つとその女の子は大きな声で叫んだ。
て、言うか窓ガラス割って入るなよ。

「あれ? お前だれだ?」

その子はこちらに気づくと箒を片手に持って歩いてきた。

「そっちの子は確かフランドールとかいう名前だったはず。そっちのお前は始めて会うぜ!」

フランの方は知っているみたいらしいが……

「フラン、この人はいったい誰なんだ?」

「昨日やって来てお姉さまと私を倒した人。私の時は二人がかりだったけど、もう1人の巫女の方はいないね。」

ああ! この女の子がこの前俺をフランから助けてくれた女の子の一

人か。

格好からして白黒の方で間違いないだろうな。
そうだ！助けてくれたお礼は言わないとな、

「この前はフランから助けてくれてありがとう。お蔭で何とか生き延びることができたよ。」

そういうとその白黒の女の子はこちらの顔をジーと見て

「ああ！お前はあの時、そのフランと一緒にいた男か！ちゃんと動けるようになったんだな！」

「まあね、っと自己紹介が遅れたな。俺の名前は日野 恭一。今はここでフランの教育係をやってるよ。」

「あたしの名前は霧雨 魔理沙！いわゆる普通の魔法使いだぜ！」

「じゃあ、よろしく魔理沙。」

「よろしくだぜ！恭一！」

よろしくっと言ってお互いに自己紹介をする。

しかし、普通の魔法使いって何だ？他にも凄い魔法使いとか弱い魔法使いとかいるのだろうか？
そんな事よりも

「今日は何の用事で来たんだ？もうフランはおとなしいぞ。」

「うん。もう落ち着いたから何も壊さないよ。」

「いや、今日は別の用事でやってきたんだぜ。本を借りると昨日約束したからな」

本？何の本だろう？まさかドラレンジャーとかだろうか？

「図書館の窓を割って入らないでちょうだい。ホコリが喉に入ってしまうわ。」

そんなくだらない事を考えていると奥から小悪魔さんを連れたパチユリーがやってきた。

「こほ！こほ！………それで、何の用事で来たの？」

「今日は本を借りに来たんだぜ！昨日約束しただろ？」

「ああ、こんなに早く来るとは思わなかったわ。約束だし好きな本を持っていったいいわよ。ただし、一冊だけよ。」

「わかってるぜ！じゃあ私は本を探すからな」

そういうと本を探しに奥の方に向かった。

「パチユリー、奥の方にいった大丈夫なのか？確かあそこは色々と危ない本があるんじゃないか？」

「大丈夫よ。魔理沙は魔法使いだし、そうやすやすと危険な目にはあわないでしょう……こほ！」

「パチユリー様、大丈夫ですか？」

「どうかしたのか？パチュリー？」

「大丈夫？」

あまりにもパチュリーが咳き込むので俺とフランはパチュリーの心配をする。

「ええ……こほ！私は喘息持ちなの、こほ！こほ！！だから、あまりホコリのあるところには行きたくない………こほ！」

「それなら早くここから離れた方がいいぞ」

「そうさせてもらうわ、魔理沙の事はよろしく頼むわね」

「ああ、まかせとけ」

「うん！大丈夫だよ！！」

「ありがとう。それじゃあ、もう行くわね。」

そういつてパチュリーは小悪魔さんに支えられながら図書館から出て行った。

しかし、魔女なんかも喘息になるんだな。

薬か何かで直せそうな気がするんだが無理なんだろうか？

「ふいゝ大量！大量！やっぱりここには色々面白そうな本が山ほどあるぜ！」

山ほど本を抱えた魔理沙がこちらに向かってやってくる。

そしてテーブルの上に風呂敷を広げるとその中に本を置いて落とさないように風呂敷をしっかりと結んでいく。

あれ？本って1つだけじゃなかったか？

「魔理沙、本は1つだけじゃなかったのか？」

「しょうがないんだぜ、色々と私の興味をそそる魔術書がいっぱいあったからな。1つに選びきれなかったんだよ。」

しかしパチュリーに後を任せると言われた手前、そうそう持っていさせる分けにはいかない。

「また今度に持っていけばいいだろ？今日は一冊だけにしとけて」

「そういうわけにもいかないんだぜ。私は今日持って帰りたいんだ。だから持って帰るんだぜ！」

何なんだろう？このジャイ○ン理論。

「それじゃあ、またな恭一！フラン！」

そんなことを思っていると魔理沙はとっと風呂敷を箒に結ぶと、箒の柄にまたがって凄い速度で飛んでいった。

「いっちゃったね。恭一」

「ああ、行ったなフラン……後でパチュリーに謝ろうな。」

止めるまもなく魔理沙はそのまま高速度で、来る時に破った窓から外に出て行った。

俺は止められなかった事を後でパチュリーに謝ろうと思ったがその前に魔理沙に対して

「借りるというか強盗に近くね？窓とか破るし」

と思ったのだった。

――――

あの後きちんとパチュリーに謝罪した。

頼まれたのに何もできなかったのはさすがに悪いと思ったのできちんと謝ることにした。

その時パチュリーは

「しょうがないわ。あの子ならそんなことを平気でしそっだしね。今度返してもらえばいいからそこまで気にしないでいいわ」

といって許してくれたが俺には魔理沙が本をずっと返さないような気がしてたまらない。

まあ、気がするだけなんで次来た時はちゃんと返すだろうと思いパチュリーと分かれて自分の部屋に向かう。

ちなみにフランは本を読みすぎて疲れたのか今では俺の背中に乗って

「すう……すう」

といって寝息をたてている。まあ、外に出て色々気分が高まっていたんだろう。

「起こすのもかわいそうだしこのまま部屋まで運ぶか。」

フランを部屋で寝かせてあげようと思いそのまま背負って廊下を歩いているとぼったりとレミリアに会った。隣には咲夜さんもいる。

「あれ？レミリア？こんな所であうなんて奇遇だな？」

「そうね。あなたこそ何処に行こうとしているの？」

俺は背負っているフランを見せると

「フランが疲れて寝ているから部屋まで運んでベットで寝させてあげようと思って。そっちはどこかにいく途中か何かか？」

「そうよ。それで……フランのことなんだけど私が背負ってあげてもいいわよ？」

その言葉に俺はレミリアをジッと見る。
その視線にレミリアは

「な、なんなのよ？じっと見て。私のカリスマ溢れる姿がそんなに美しいのかしら？」

「いや、レミリアがフランの事が本当に大好きなんだなって思っ
てな。」

「な！何をいつているのよ！別にそんなじゃないわ！私はただお前にフランの部屋に入れさせるわけにも行かないと思って言ったのよ！寝ているフランに何をするかわからないから仕方なくよ！仕方

なく！」

「はいはい。分かった、分かった！それじゃあフランを渡すから少し待っててくれ。後、咲夜さん。少し手伝ってください。」

「はい。畏まりました。」

咲夜さんに手伝ってもらいフランを一旦俺の背中から下ろすと慎重にフランを抱えてレミリアの背中に乗せる。

「ほら、レミリア。ちゃんと背負えよ？」

レミリアに言うがレミリアはまったく答えない。不振に思っ顔を見ても

「ああ！初めてフランを背負うことができるわ！これも姉冥利に尽きるという奴ね。でも、何てフランは軽いのかしら。ちゃんとご飯を食べているのかしら？もし食べ………」

ずっとフランのことに關して喋っており、すでに心は此処にあらずといった感じだった。

「おいしい、シスコンすぎるだろ。」

どんだけフランの事を溺愛してるんだ？この子は？フランがレミリアに対してどこかよそよそしい態度を取っていたからだろうか、フランの前では少し冷たい印象を受けていたんだが、こう見ると全然態度が違うなと思う。

「フラン。これを気に少しはレミリアに甘えてみたらどうだ？」

小声でフランに耳打ちをする。

実はフランは俺が下ろす際に目を覚ましていたが、レミリアのフランに対する本心が分かるということでもそのまま寝た振りをさせていたのだ。

フランが少しだけ首を縦に振ったので、俺は少し笑うとそのままレミリアから離れて咲夜さんの隣に付いた。

「それじゃあ、フランの事をお願いします。俺は腹が空いたんで適当にご飯でも作って食べます。あ、食材使わせてもらってもいいですか？」

「よろしいのですか？言われれば私がお作りしますが？」

「いえ、咲夜さんはレミリアに付いていてください。あの状態じゃあ部屋にたどり着かないかもしれないですから」

レミリアの方を見てみると未だにフランを背負ってその場に立っている。

「わかりました。それでは、食材はキッチンの方にありますのでご自由にお使いください。それでは失礼します。」

「はい、こちらもあります。ありがたく使わせてもらいます。」

お礼をいって咲夜さんもレミリアに向かって歩いていく。俺はご飯を作るためその方向とは逆方向に向かって行った。

「家族水入らずの場面を邪魔するわけにもいかないしな。」

そのまま俺はキッチンへと脚を向けるのだった。

――――

「上手にできました〜〜〜〜!!」

キッチンに行くと色々な食材があったのでそのまま夕食を作ることにする。

案の上、トマトがいっぱいあったのでトマト料理と後は何品かを作る事にする。

メニューはトマトスープと肉があったのでハンバーグのトマトソースがけ。

あとは、トマトのサラダに焼きトマト。

全部トマトを使った料理だがまあいいだろう……そんな事を思いながら手早く料理を作っていく。

実は俺は料理ができるのだ。

家の親が料理ができず必然的に俺が料理を覚えなければいけないような状況になったため必死に練習してできるようになったのだ。

ちなみに母は料理自体は好きなのだが何故か味は信じられないほど不味いといった、はた迷惑な事をしてくれる。

どうせ、性格もかなり大雑把だから調味料なんかも適当に入れているからだと思う。

何回注意しても聞く耳を持たないのだ。

まあ、それはさておき自分の夕食は作ったのでそのままテーブルに並べて食べようとすると、

「あら、中々上出来な料理ができているじゃない。男だから大雑把な物かと思ってたけど中々いいんじゃないかしら？」

食堂に入ってきたレミリアが俺の料理を見るなり、そういつてくる。

「何だ？レミリアも食べたいのか？それなら作ってあげてもいいけど」

「別に食べる必要はないわ。ただ男が料理を作るのが面白いから見てただけ」

そうは言うがお前の視線はハンバーグからまったく外れていないんだが。

普通に食べたいって言えば作るのに。

「私は食べて見たいと思います。他の人が作る料理も気になりますし。作っていただけないでしょうか？」

「わかりました。なら座って待っててください。直ぐに作りますから。」

レミリアに続いて入ってきた咲夜さんがそういうので俺は再び作ることにする。

「私のはかまわないわよ。」

あいかわらずハンバーグから目を離さないレミリアだが、そんなじつと見ていると説得力がまったくないぞ、と思う。

「丁度、料理の種が後二人分あるから食べてくれないか？あまらせ

るのももったいないからできれば食べてほしいんだけど。」

「そ、それならしょうがないわね！食べてあげるから早く作りなさい。恭一。」

「はいはい。仰せのままに」

俺は再び料理を作るべく厨房に戻っていった。

「そう言えばフランは部屋で寝ているのか？」

二人分の料理を作り一緒に食べた後フランの事について聞く。
ここにいないから多分本当に寝たんだと思うけど。

……ちなみに、料理の評判は結構よかった。機会があればまた作りたいと思う。

「フランなら部屋で寝ているわ。ベットに入れると直ぐに寝息をたてていたわ。」

レミリアが食後のワインを飲みながら言う。

子供がワインなんて……と思ったがレミリアもかなりの歳をとっているはずなので別にいいのか？と思う。

そして俺もありがたく頂いている。

年齢自体は未成年だが酒は隠れて度々飲んでおり大好きなのだ。

「今日は結構はしゃいでいたからな。眠たいのも当然だろう」

「その通りね。図書館に行ったのも始めてだろうし、興奮するのも無理ないかもしれないわね。ただパチュリーが喘息を出して寝込ん

でいるのは考えなかったけど。」

あれは魔理沙のせいだろう。

フランと俺は図書館にいただけだし、でもパチュリーも早く良くなって欲しいと思う。

「さて、そろそろ俺も眠たくなってきたし寝ることにするよ」

ちなみに咲夜さんは食べ終えた食器類を洗うため席を離れている。

俺は断ったのだが、気づくと食器と咲夜さんは消えていた。

多分時を止める能力を使ったのだろう。

「なら眠るといいわ。私はもう少しワインを飲んでからにするから遠慮せずに部屋に戻っていいわよ」

「そうさせてもらうよ。じゃあ、おやすみレミリア。咲夜さんにもおやすみと伝えておいて」

「ええ、おやすみなさい……………それと恭一、今日はありがとう。あなたのお蔭でフランとの距離が大分、縮まった気がするわ。」

「別に俺は何もしていないんだが……………フランと仲良くできたならよかったんじゃないか？」

「ええ……………そうね。ほんと今日はいいい日だったわ。」

姉妹は仲良くが一番。

そう思いながらレミリアと別れて自分の部屋に戻り、今日一日が終わるのだった。

第4話 箒に乗った女の子。そして連れ去られていく本たち（後書き）

しかし、吸血鬼って本当にトマトが好きなんですかね？確かに血の色には良く似てはいるんですが、味的にはまったく違うので、どうなんだろう？と、この話を書きながら思いました。

ちなみに、トマトは昔は毒物と思われていたらしいですよ。

それで、ある人物が目障りの奴を殺そうと思いついてトマトを料理の中に入れて食べさせてみたが死なずに、それどころか以外に美味しかったという話らしいです。

最後に……………トマト、おいしいです！！

第5話 はじめてのお使い。人里も添えて（前書き）

今回は人里に行く話と慧音先生初登場の回です

第5話 はじめてのお使い。人里も添えて

「今日はあなたに買出しに行ってもらうわ」

この一言で、俺の幻想郷での始めてのお使いが始まった。

それは、苛烈を極める戦いの始まりでもあった。

村に行く途中で妖怪に遭遇し、そこで一時瀕死になるも俺の秘めたる力が覚醒しその妖怪を撃破。

自分の本来の力に気づき、その力を狙う多くの妖怪たちと来る日も来る日も戦い続ける日々。

一時は戦いの影響で心が荒んでいくも、戦いの中で得たかけがいのない親友、そして恋人に助けられ最後にはこの幻想郷の頂に辿り着く………なんて事は無く、ただ単に今朝起きたら今日はフランの事はいいから、村の方にまで食料の買出しに出かけて欲しいとレミリアに言われたのだ。

「別にそれはいいけど、その村ってのは何処にあるんだ？俺はこの事なんてまったく分からないぞ。第一この館から出たことないし。」

「それは、大丈夫よ。今日はこの咲夜と一緒に出かけてもらおうから…いつのまにかレミリアの隣に現れた咲夜さんを指差すレミリア。

「はい。今日は私が案内させていただきます。」

そういつて一礼する咲夜さん。

「よろしくお願いします。」

そう言って俺も頭をさげる。

「それじゃあ、行つてらっしゃい。この紅魔館から人里までは大分距離があるから早く行つたほうがいいわよ。」

そうなのだ。咲夜さんなどは飛んで行くことができ（これは魔理沙が箒に乗って飛んでいるのを見た時どうやって飛んでいるのか気になって食事の時にレミリアに聞いた。ちなみに紅魔館の住人は皆飛ぶことができるらしい）るが俺は飛ぶことができないので、歩いていくしかないのだ。

まさか、咲夜さんに抱えて飛んでもらうわけにもいかないだろう。

こうして俺と咲夜さんの買出しの一日が始まった。

「フランも連れて行きたかったけど、こればかりはしょうがないですよね。そのうち連れて行くことができるようになるといいんですけど。」

そう、今回村に買出しに行くのだが、その時にフランも一緒に連れて行ければっと思ひ聞いてみたのだが、それは駄目との事だった。理由は、フランが吸血鬼なので日光に弱いこと。

これは日傘を差せばいいらしいのだが、問題はもう1つの方にある。それは、フランが吸血鬼という事だ。

人里というからには当然、人間の里であるしそこには人間が大勢いる。

他にも半妖といった人物もいるらしいのだが、その人物は極わずかな数らしい。

そして、妖怪は人間を食べる存在。

そうなる、どうしても人里に来た妖怪の存在を、気味が悪がる人物も出てくるだろう。

そういった視線をフランが受けて、その結果耐え切れずに能力が暴走してしまったら大変な事になってしまう。

人里では、妖怪は人間を襲ってはならない決まりがあるらしく、これはどの妖怪にとっても絶対の掟のような物で、もしそれを破ることになると、この幻想郷を作った妖怪の賢者と言う人物が制裁に来るというのだ。

そうならないためにも、フランを連れて行くことができないということだった。

「いつか妹様も外の世界に出て色々な出来事を体験できればと思いますが、今は仕方の無い事と思われます。」

咲夜さんと村まで歩いていっているのだが、ただ歩くのも暇なので色々話をしながら向かっている。

「咲夜さん、もう少し砕いた口調で話してもらえませんか？どうも、丁寧な口調で喋られると首の辺りがむず搔いんですけど。」

そう咲夜さんと話して思っていたのだが、どうもこの丁寧な口調がむず痒く感じてしまう。

どうも、咲夜さんは俺の事を紅魔館の客人として扱っているようにも思えるのだ。

できればいつまで居るのかはわからないのだが、一緒に住む事になるので、客人扱いはやめて欲しいと思う。

「よろしいのですか？」

「はい。できたら、砕けた喋り方をしてくれると助かります。」

「では、わかり………わかったわ。」

やっと別の口調で喋ってくれたな。よかったよかった。

「それじゃあ早く人里の方に向かいましょうか。早く行かないと夜になってしまうわ。」

「わかりました、それじゃあ、急ぎましょうか。」

そして幾分か歩く速度を早くして俺たちは人里に向かった。

――――――――――

「へえ、ここが人里ですか」

あれから幾分か歩いていると目の前に村らしきものが目に入り、そのまま中に入る。

中は本当に里といった感じで、本当に昔の村といった感じだった。

「そうよ。ここがこの幻想郷唯一の里になるわ。あまり見る時間はないから、早くいる物を買って帰るわよ。」

「うっす。それじゃあ、まずは何処から行きますか？」

「まずは米屋ね。行くわよ。」

そして紅魔館に必要な日常品を買って行く。その際に店の人にちゃ

んと挨拶をしていく。

「おう、見ない顔だな。新顔か？」

「はい。この前に此処にやって来た日野 恭一って言います。これから度々来ることになると思うので、よろしく願います。」

「おう！よろしくな！坊主！」

こんな感じで行く店行く店に挨拶をしていく。

そして全ての用事が終わる頃には俺の両腕は色々な物で塞がっていた。

「結構色々と買いましたね。咲夜さん。」

「ええ、これで全部かしらね。それじゃあ、帰りましょうか。」

買う物は買ったので、紅魔館に帰ることにする。

「じゃあ、暗くならない内に帰りましょうか。」

そういつて咲夜さんの方に振り向くとそこには、咲夜さんの他に帽子をかぶった女性がいた。

その女性は大変綺麗なのだが、帽子の横から大きな角が出ていた。あれ？この人は咲夜さんの知り合いか誰かな？

「その少年。この女から離れたほうがいい。この女は吸血鬼の一味だぞ。」

そう言いつて咲夜さんの方を睨みながらこちらに向かって話す女性。

「この女の主は、最近ここの住人を襲って血を吸ったのだ。幸い命に別状は無かったのだが、またしないとは限らないからな。だから私がこの女を見ている内に早く離れた方がいいぞ。」

どうやら、この女性は咲夜さんの事を人間を襲う吸血鬼の一味だと思っているらしい。

咲夜さんかというとその女性を冷たい目で見ているだけだ。

「あの、すみません。あなたは誰なんですか？あ、俺の名前は日野恭一っていいいます」

黙っていても始まらないので一先ず名前を聞くことにする。

「私の名前は上白沢 慧音という。見ての通り私も妖怪ではあるが半妖で、ハクタクといった妖怪になる。この里で子供たちに寺小屋を開いており、そしてこの里の守護も同時に行っている。」

ああ、だから咲夜さんに関して以上に警戒しているんだ。また人を襲うかも知れないと言う事で。

それに半妖の人なんだ。

どうりで頭に角があると思った。

しかしハクタクって何だ？そんな事を考えるが、その前にまずは、このピリピリした雰囲気はどうにかしないといけない。

「俺の事は心配いりません。此処には少し前に来たばかりなんですけど、色々あって、今は紅魔館に住まわせてもらってます。」

「吸血鬼の館にか？襲われたりしないのか？」

「いえ、良くしてもらってます。右も左もわからない俺を置いてくれるんですから、本当に感謝してます。それに、もう里の人も人里の中にいる限りは約束通り襲わないと思います。」

確か、魔理沙ともう1人の巫女にやられた時にそのような約束をしたはずだ。

俺がそう言うのと、慧音さんは少しの間考えて

「わかった。今は君の言うことを信じよう。しかし、引き続き警戒はさせてもらう。いつまた襲ってくるか分からないからな。」

それはしょうが無いことだと思う。

一度襲ったという事実は中々消すことはできないので、徐々に薄れていけばと考える。

俺が話している間は咲夜さんはずっと口を閉ざしており、一言も発することは無い。

そういうば、買い物をしている最中もほとんど話すことはなかったな。

やはり、色々と問題があるのだろうか？

でも、フランにも、もっと多くの物を見せてあげたいのでいつかはこの雰囲気を払拭できればと思う。

「それじゃあ、俺たちはもう行きます。また、此処に来た時はよろしく願います。」

「ああ、その時はな。それと、君は外からきたと言うみたいだから、時間があるときに博麗神社という場所に行くといい。その巫女はこの幻想郷と外の世界を分ける結界を管理しているから、もし君が外にでたいと言うなら力になってくれるはずだ。」

「ありがとうございます！」

よかった！これで少ないながらも帰る見込みができた。
巫女というぐらいだからもしかしたら魔理沙の他のもう1人の方なのかもしれない。

今度、時間ができた時に会いに行こうと思う。

「それでは、私は用事があるので失礼するよ。それとその女。くれぐれも里の者には手を出すなよ。」

「かしこまりました。此処にいる以上は手出しはいたしません」

慧音さんの言葉に咲夜さんは慇懃無礼に言葉を放つ。

慧音さんはその言葉に眉を少し上げるが、特に何も言わずに後ろを向いて歩いていった。

「それじゃあ咲夜さん。俺たちも帰りましょうか。」

「そうね。帰りましょうか」

気まずい雰囲気のまま一先ず、紅魔館に向けて帰ることにした。

――――――――――

紅魔館に帰る途中一言も発することなく帰っていたのだが、不意に咲夜さんが口を開いた。

「ねえ、恭一。あなた、さっきのハクタクの話を聞いてどう思った？」

「どうって………あの人を襲ったって話ですか？」

「そう。その話の事よ。私は吸血鬼であるお嬢様の下にお使いしているわ。だからお嬢様の命令なら例えどんな事を言われても実行するわ。例えば、あなたを殺せと言われても。」

そこで空気が冷たいものになる。

確かに、咲夜さんならば微塵の躊躇なく俺を殺すだろう。

咲夜さんを見ればレミリアに対して絶対の忠誠を誓っているというのがよく分かる。

ならば、逃げるか？という考えも出てくるが、そんな考えは、はなっから無い。

いきなり現れて、見ず知らずの俺を住まわせてくれているのはこの紅魔館の主のレミリアだ。

確かにフランには殺されそうになったものの、フラン自身もその時は心に問題を抱えていたし、今現在俺は助かっているのでよしとする。

それに、フランの楽しそうな笑顔やレミリアのフランに向ける笑みを見ると、どうにも俺を殺せなんていわないような気がする………：まあ、気がするだけだけど。

パチュリーや小悪魔さんは、まあ昨日あったばかりで分からないのだがあの雰囲気だとそんな心配は無いと思う。

そこまで考えて俺は咲夜さんの顔を見ると

「確かに、吸血鬼や妖怪は怖いかも知れませんが。現にレミリアや咲夜さんは慧音さんの言った通りに人を襲ったんでしよう。」

俺の言葉に黙って話を聞く咲夜さん。

「でも、今は襲っていないといえますし、その辺は怖くは無いと思っています。レミリアは約束を行ったのならきちんと守りそうな雰囲気ですし、それにフランの教育係をやっている間はレミリアは俺を殺せなんて事は言わないと思います。あんな妹大好きの様子を見ていると、俺のことはどうでもいいとしてもフランが俺に懐いているので殺してしまっただけ悲しませるような事はしないと思います。まあ、フランに懐かれていると思うているのは俺の勘違いかもしれませんが」

「だから、俺はこの紅魔館から出て行こうとは思っていませんし、これからもこの態度を変える事はないと思います。もともとただで住まわせてもらっている以上もう少し遠慮をしなければいけないとは思いますが」

そこまで言い切ると、咲夜さんは少し考えた後

「そう。そこまで言うのなら私からは何も言う事はないわ。ただ、1つだけ約束をして欲しいの。」

「約束……ですか？」

「そう。紅魔館に居る以上絶対にお嬢様や妹様を恐怖の目で見ない事。そして、妹様を悲しませないこと。妹様が悲しめば、その姉であるお嬢様も悲しませてしまうことになるわ。その二つの内、どちらかが守れなかった場合、私は躊躇なくあなたを殺す。」

そういった咲夜さんの目は本気で、そこから、本当にレミリアやフラン、特にレミリアの事を大事に思っているのだと思う。

だからこそ、人里の時、慧音さんが咲夜さんに向けたような目や思いをレミリアたちに向けてはしくは無いのだろう。

そのために紅魔館に帰る前に今この場で俺の思いを確認しているのか。

「わかりました。約束します。俺はその二つを破ることを絶対にしないと誓います。」

その言葉に咲夜さんはほっとした顔をする

「ごめんなさい。紅魔館に帰る前にどうしても確認しておきたかったの。あなたもあの人里で私を見る目を見たでしょう？あのような目をお嬢様達にむけるわけにはいかない。特に妹様はあなたに懐いているみたいだからなおさらね。改めてこれからよろしくね、恭一。」

「ええ、よろしくお願ひします。咲夜さん。」

最後によりしくと言って微笑んだ咲夜さんの顔は本当に綺麗だった。

第5話 はじめてのお使い。人里も添えて（後書き）

慧音先生なんですけど人里の守護者ということで、咲夜さん達を警戒するような立場をとらせる事にしました。

慧音さんはハクタクの半妖ですけど、あまりそのような感じがしませんよね？

病気を治すどころか頭突きをしているし………。

第6話 妖怪の体ってすごい！特に頭部が！（前書き）

今回は美鈴登場の回です。

しかし、美鈴はナイフを頭に刺されても結構平気な顔をしていますよね。

しかもそれが日常茶飯事に行われているのが怖い！

第6話 妖怪の体ってすごい！特に頭部が！

「あ、おはようございます！恭一さん」

「おはようございます美鈴さん。今日も早いですね。」

「そりゃあ、わたしはこの紅魔館の門番ですもん。ちゃんと守っていないと、後で咲夜さんから叱られますからね」

今話している人は紅、美鈴さんといってこの紅魔館の門番をしている人なのだ。

なぜ今まで会わなかったのかというと、この前の魔理沙と巫女の二人が紅魔館に来た際に門番として魔理沙と戦い敗れて、負傷し今まで自室で療養していたので、出会う事がなかったのだ。

初めての出会いには咲夜さんとの人里の帰り道で門番に立っていか寝ていたというか、とにかくその時に初めて出会ったのだ。

その時の話をする

――――――――――

「あれ？行く時には誰も居なかったのに今は誰か立っていますよ？」

荷物を持って帰る途中行きがけは誰も居なかったのだが、今はチャイナ姿の女性が紅魔館の門の横に立っている。

「ああ、あの子は紅魔館の門番の美鈴という子よ。この前来たあの

箒にのった魔法使いに弾幕ごっこで負けて怪我をおって自室で療養していたのだけでも直ったのね。」

「へえ、そうだったんですか。それなら、挨拶しなきゃいけないですね。おゝ……」

「ちょっと待って。」

俺が美鈴さんに挨拶をしようと声をかけようとしたのだが咲夜さんによってさえぎられた。

「どうしたんですか？咲夜さん？」

「ちょっと声をかけるのは待ってくれる？確認したいことがあるから。」

咲夜さんはそう言うとそのまま黙って美鈴さんの所に向かう。

俺も咲夜さんに従って、黙って美鈴さんの近くに行く。

しかし、美鈴さんは俺たちが近づいているのに何で何も言わないのだろうか？俺はともかくとして、咲夜さんには声をかけてもいいと思うのだが。

そんな事を考えながら近づいてみると、なにやら

「スー。スピー。」

といった寝息のような音が聞こえてきた。
もしかして、この人立ったまま寝てる？

「やっぱり、寝ているわね。」

「あの、この人立ったまま寝ているんですけどいつもこんな感じなんでしょうか？」

「ええ、紅魔館の門番として恥ずかしい話なんですけど毎回こんな感じで人が見ていないと直ぐに眠りにつくわ。少し待ってて。」

そう言うとき夜さんはどこからか、ナイフを突然だす。

「それ、ナイフですけど、どうするんですか？」

どこから出したのかも気になるが、その前にそのナイフで何をするのだろう？

「こうするのよ。」

夜さんはそのナイフを美鈴さんの頭に突き刺した。
は？頭に刺した！？美鈴さん大丈夫なの！？

「あいつつつつつつたああああああ！！頭！頭にナイフが刺さってますよ！！」

頭にナイフを刺された美鈴さんが大声を上げて痛がるのだがそれだけである。

いや、普通ナイフを頭に刺されたら、そんなもんじゃないでしょ。
普通だったら死にますよ。

「は！？これは夜さん！お帰りなさい！夜さんが帰るのを待ってましたよ！」

「嘘おっしゃい。あなた、立ったまま寝てたでしょ。だから、罰と

してナイフを頭に刺させてもらったわ。」

「うう、すいません。最初は頑張っていたんですけどついとうと来て寝てしまいました。」

咲夜さんと美鈴さんは和やかそうに話しているけどナイフが刺さっているからね。

まずはそこをおかしいと思おうよ。

「あれ？ところでこの方はどなたですか？見たことの無いかたですけど。」

ナイフを頭に刺したまま俺に気づき咲夜さんに尋ねている。

「ああ、この人は最近ここに来て色々な事があって、最終的に妹様の教育係りになった人間の日野 恭一よ。」

「ああ、そうだったんですか。よろしくお願いします。恭一さん。私の名前は紅 美鈴といいます。」

「ええ、よろしく願います……ところで頭のナイフは大丈夫なんですか？かなり深く刺さっているんですけど。」

朗らかに挨拶を交わす美鈴さんだが、俺は頭のナイフが気になってしょうがない。

「ああ、これですか？お恥ずかしい所を見られてしまって」

そういつてナイフをすばんと抜く。

そしてかなりの勢いで血がでるが美鈴さんは特に気にする様子がない。

い。

「あの、大丈夫なんですか？かなりの血が出ているんですけど。」

「ええ、大丈夫です。ちょっとだけ痛いですけど直ぐに治ると思いますから。いつものことですし、特に問題はないと思います。」

いつもの事なんだ……その言葉に驚くも本人は平気そうなので特にその先は聞かない。

「この子も立派な妖怪だから、ナイフが刺さったぐらいじゃ死なないわ。だからこそお仕置きとして行っているのだけど、それでも寝ているのよね。」

「そんないつも寝ているわけじゃないですけど……」

「何か言った？」

「いいえ、何も言ってません……」

美鈴さんが反論しようとするが、咲夜さんが鋭い目で美鈴さんを睨むと美鈴さんは小さくなってしまふ。

しかし、妖怪ってのは本当に頑丈なんだな。

頭にナイフが刺さるのがいつものことで済ませるなんて。まったく凄いものである。

「お恥ずかしい所をお見せしましたが、これからよろしく願いますね恭一さん。」

「はい。こちらこそ」

「だいたい私はここに門番として立っていますからたまに会いに来てくれると嬉しいです。毎日1人で此処にたっているので暇で暇でつつい寝てしまうんですよ。だから恭一さんが来てくれると私の暇も潰すことができるんで遠慮なく来てくださいね。」

咲夜さんの前でそんなことをどうと言うと美鈴さん。

あ、咲夜さんの顔が少し動いた。

「美鈴。あなた、さっきので懲りてないみたいね？もっと頭に穴を増やして欲しいのかしら？」

「い、いいえ！遠慮しておきます！！わ、私は門番の仕事があるので失礼しますね！あゝ門番の仕事いそがしいな」

咲夜さんの剣幕に慌てて誤魔化しながら美鈴さんは咲夜さんから離れていく。

「それじゃあ、また会いましょう恭一さん。」

「はい。その時は話でもしましょう。」

そう言ってお互い別れた。

「さて、それじゃあ荷物を置きに中に入りましょうか。」

「はい」

そして、美鈴さんと別れた俺と咲夜さんは荷物を置きに紅魔館の中に入っていた。

――――

と、まあ俺と美鈴さんの出会いはこんな感じだった。

「それで、恭一さんは今日は何処に出かけるのですか？見る限り1人で出かけるみたいですけど。」

「今日は巫女のいる神社に行こうと思ってるんですよ。昨日、人里で慧音さんって人に博麗神社の場所を聞いたからそこに向かおうと。その巫女がこの幻想郷から出る方法を知っているみたいですから。」

「そうだったんですか。では気をつけて行ってくださいね。」

「ありがとうございます。夕方ぐらいには帰ってくると思います。それじゃあ、行ってきます。」

「はい。行ってらっしゃい。」

さて、博麗神社か………どんなところかな？

若干の期待を持ちながら俺は博麗神社に足を進めるのだった。

――――

「ここがその博麗神社みたいだな。しかし近くにあると思ったけど歩いてみると結構の時間がかかったな。」

博麗神社まで紅魔館から歩いてきたのだが、ここまでかなりの距離を歩き、早い時間に着くつもりだったのだが大分時間がかかってしまった。

「山道だし、周りは森ばかりだし、意外とへんぴな所にあるな。」

俺は目の前にある階段を上りながら、博麗神社へと向かう。

周りは気しかないが此処だけ急に人工的な階段になっているので、上にあがれば多分神社が見えてくるだろうと思いき死になって階段を上る。

しかし、長い階段だよな。

必死になって階段を上がりおえると、そこには神社があった。

「よかった。やっぱりここが博麗神社でよかったな。」

ひとまず神社があった事に安堵し中に入る。

周囲を見回しながら歩いていると信じられない光景が目に入った。なんと巫女姿の女の子が神社の母屋に続く道の真ん中辺りで地面に仰向けになって倒れていたのだ。

「ちよっ！大丈夫か！」

慌てて倒れている女の子に近づき体を抱きかかえる。

病氣や怪我だったら直ぐに人里に行って医者などを呼ばないといけない。

里に医者が居てくれればいいのだけど。

そう考えながら、女の子の様子を見る。

すると小さな声で何か言っているのがわかったので女の子の顔に耳を近づける。

「お腹すいた……………」

「……………」

「お腹がすいて一步も動けない……………」

どうやらお腹がすいて動けないらしい。

病氣や怪我じゃなくて良かったのだが、動けなくなるまで腹が空くというのはどうなのだろう。

しかし、丁度よかった。

実はここに来る前に幻想郷からでる方法を聞くための御礼として神社に備えるためのお米やら野菜お神酒などを咲夜さんをお願いしてもらったのだ。

その代わり、今度咲夜さんの仕事を手伝うわなければいけないのだが、それはここで話すことではないだろう。

まあとにかく、腹に溜まりそうな食料を持ってきたので一旦地面に倒れている巫女を抱きかかえて失礼とは思いつつも母屋の中に入り畳に寝かせる。

「さて、それじゃあご飯でも作りますか」

どうにもまずは、巫女の腹をどうにかしないと結界の話も聞けないため勝手には思いつつも台所を貸りて料理を作りだす。
どんな料理を作ろうか………と考えながら俺は袖を捲くりながら考えるのだった。

第6話 妖怪の体ってすごい！特に頭部が！（後書き）

ジャックランタンは美鈴さんの事をずっと（みすず）と思ってました。

最近になってやっとメイリンだということに気がつきました。
私気づくのおそー！

第7話 親切な行動には裏がある？（前書き）

今回は霊夢、紫、藍登場の回と恭一の幻想郷入りの説明の回です。

第7話 親切な行動には裏がある？

「よし！こんなもんでいいだろう。」

俺は勝手に台所を使わせて悪いと思いつつも腹を空かせている巫女のためにご飯を作った。

まあ、材料事態も少ししか持ってきていないので、おにぎりと野菜炒め。

それに味噌があつたので茄子を入れた味噌汁を作った。

「口に合えばいいんだけど……とりあえず持って行くか。」

できた料理を持って居間で倒れている巫女に持っていく。

「ほら、ご飯ができた……」

俺が言い終わるよりも早く、巫女は俺の手に持っている料理を奪い取るとそれを怒涛の勢いで食べていく。

「はぐはぐはぐはぐはぐ！ずず……ふう、はぐはぐ……んっぐ！！」

そりゃあ、そんなに勢い良く食べれば喉にも詰めるわな。

喉に物が詰まったらしく息がでずに顔を徐々に青ざめていく巫女。俺は居間にあった急須で巫女にお茶をいれてやる。

「んぐんぐんぐんぐんぐん！」

俺が入れたお茶をひったくって勢いよく飲んでいく。

「ぷは~~~~満足満足！さすがに3日間も何も食べないでいたら死ぬかと思ったわ。」

三日も何も食べなかったんかい。

どんだけこの神社は金に困っているんだ。

そう思っていると目の前の巫女がこちらに声をかけてくる。

「ひとまず助かったわ、ありがとう。あなたがこのご飯を作ってくれたんでしょ？味はなかなか美味しかったわ。」

「そいつはどうも。それより何でそんなに腹を空かせていたんだ？」

「それは、私の神社にお金が無いからよ。」

それは至極当たり前の話である。

そりゃあ、金がなかったら物は買えないわな。

「外にお賽銭箱は置いてあるんだけど誰も中に入れてくれないのよ。それどころか参拝にくる人すらない状況。まったく、困ったものだわ。」

そういってお茶を飲んで一息つく巫女。

「ああ、そういえば挨拶がまだだったわね。私の名前は博麗 霊夢。この博麗神社の巫女をやっているわ。」

「俺の名前は日野 恭一っていう。最近この幻想郷に来て、今は紅魔館に住んでいる、ただの人だ。」

「知ってるわよ。というよりは私とあなたは一度会ったことがあるもの。まあ、あなたは気絶をしていたからわからないでしょうけど。」

ああ、やっぱりあの時フランの暴走を魔理沙と一緒に止めてくれた巫女だったんだ。

名前は聞いてなかったが此処に巫女が居ると聞いたので多分そうじゃないかと思っていたんだけどやっぱり思ったとおりだったな。

「あの時は本当に助かったよ。意識は無かったけど下手をしたら死んでいたからね。博麗には感謝している。」

「霊夢でいいわよ。今回私を救ってくれたみたいなものだから別に気にしないでいいわよ。でも、どうしてもしたいっていうなら、素敵なお賽銭箱はそこにあるわよ。」

賽銭箱のある方に指をさしながら霊夢がいう。

しかし、俺は幻想郷で使える金を持っていないので入れる事はできない。

石ころとか入れたら怒るだろうか？

「まあ、いいわ。それで、あなたはどうしてもしてこの幻想郷に来ることになったの？」

そうだ！今日は幻想郷から出るための方法を霊夢に聞きにきたんだった。

霊夢の質問にここにきた理由を思い出す。

「それが、家に帰る途中で急に足元に穴が開いて、そのまま落ちたらこの幻想郷に着いたんだ。ほんと分けの解らない状況だよ。ここ

に来て俺に何をしろっていうのかね？」

「ふ〜ん……ねえ、その穴の中は目がいっぱい光景じゃなかった？」

「そう！その通り目やら何かの標識やらでいっぱいだった！何か心当たりでもある？」

「ええ1つだけ心当たりがあるわ。というよりも1つだけしか心当たりが無いといった方が正しいかしら？まず、その穴を作った人物は八雲 紫っていう妖怪ね。この幻想郷を作った人物でもあるし皆からは妖怪の賢者とも言われているわ。」

八雲 紫。その人が俺を此処に連れてきたのか？でも何の理由があってここに連れてきたんだ？

「その紫なんだけど、境界を操る程度の能力をもっていて何処でも自由に行き来することができるの。それこそ、この幻想郷とあなたの住んでいる外の世界を自由に行き来できるぐらいにね。それにそんな事ができるのは紫以外知らないわ。」

「そうね。確かにそのとおりだわ。」

霊夢が話していると急に目の前の空間に穴が開いて、中から金髪の、フリルがふんだんに使われた服を着た女性が現れた。

「お初にお目にかかります。私の名前は八雲 紫と申しますわ。」

優雅な仕草でこちらに一礼をする。

「あ、すいません。俺の名前は日野 恭一といいます。」

一先ず名前を名乗られたのでこちらも名乗り返す。

この人が霊夢のいつていた幻想郷の賢者。

そして俺を此処に連れてきた人なのか。

いきなり現れて驚いたが、此処に現れてくれて丁度よかった。

この人には聞きたいことが多くあるんだ。

そして八雲さんに質問しようと口を開いた時、先に霊夢が

「どうしたのよ紫？いきなり現れて何か言われては不味い事でもあるの？」

「いいえ、霊夢。一先ず誤解を解きたくて此処にやってきたの。先に結論から言うとななたを連れてきたのは私じゃないわ。」

え？この人じゃない？俺は開いた口を閉じる。

なら誰がやったんだ？あの現れた穴を見た時、確かに中には無数の目があり、標識などもあった。

あれは俺が落ちたときに中に広がっていたものと同じものだったのに。

「じゃあ、誰がやったのよ？私が知る限り、あんな事をできるのは紫以外は知らないわよ。」

「それはね……………非常に言いづらいのだけど私の式神の藍がやった事なの。」

八雲さんがそういうとまた別のところにいきなり、先ほど同じような穴が現れて中から今度は九本の狐の尻尾をもった女性が現れた。この人も八雲さんと似たような格好をしている。

「この子が藍というのだけど、この子は私の式神なの。簡単に説明すると私の召使なようなものね。それでこの子がこの前、あの穴、厳密にはスキマというのだけど、そのスキマを作る際に暴走させてしまって、あなたの世界とこの幻想郷の世界に隙間を繋げてしまったの。そして、運が悪い事にあなたがそこを偶然通りかかってしまいそのままスキマに落ちてしまい。この幻想郷にたどりついてしまったというわけ。」

八雲さんがそこまでいうとその式神の藍さんがこちらを向き

「本当に申し訳ないことをした。今回のことは全て私の責任だ。君をここに連れてきたのも私がスキマを制御できずに暴走させてしまった結果だ。謝ってすむ問題じゃないが謝罪をさせてくれ。」

そこまで言って深々と頭を下げる藍さん。

そうか。俺はそんな理由でやってきたのか…………。

たまたまできたスキマに落ちただなんて、本当に俺は運が無いんだな。

でも、目の前の藍さんも悪いと思って頭を下げてくれているし、元の世界に帰れるなら特に問題は無いと思う。

「頭を上げてください藍さん。確かに急に連れてこられたビックリはしましたが、ここでフランやレミリア、咲夜さんといった人達にも出会うことができましたし。」

此処に来なかったらフランにも会うことが無かったしこのような体験をすることもなかったと思う。

そんな事を考えると逆にここに来ることができよかったかもしれない。

「そう……か。許してくれてありがとう。そういつてくれると私も心の重荷がとれた気がするよ」

藍さんは何処と無く影が抜けたような様子でほっと一息をつく。

「その件は、これでお終いにしましょう。それで、ここからが俺の本題なんですけど、俺は元の世界に帰る事はできるんですか？」

「それは大丈夫だ。こちらに來させることができるのだから元の世界に帰す事も当然できる。しかし、今の君の状態ではまだ帰すことができないんだ。」

「それってどういうことですか？」

帰すことができるといわれたので一先ずは安心した俺だったが、その後の今は帰ることができないといった言葉に疑問を覚える。

「説明すると、今のあなたの魂は非常に不安定な状態なの。この幻想郷を抜けるにはこの幻想郷を守っている結界を抜けなければならぬのだけど、その結界は非常に強力であたの今の魂では通ることが難しい状態なの。」

八雲さんが藍さんの言葉をついで話をする。

「今の魂の状態って？俺の魂に何か問題があるんですか？」

「あなたは一度この世界にきて死に掛けた事があったでしょう？その時に魂が一度消耗しているの。だから今のあなたの魂は弱っている状態ね。だから今の状態では結界を通ることができないの……」

でも安心して。時が立てばあなたの魂も段々と回復していくはずだから大丈夫よ。今すぐというわけにはいけないけど、そのうち時がたてば帰すことはできるわ。」

その話を聞いて胸を撫で下ろす。

もし帰れないと言われた時はどうしようかと思ったが時間はかかるが帰る事はできると言われたので良かったとしよう。

「大体どれぐらいとかは分かりますか？」

「どうとも言えないわね。その人の魂の回復力によるから正確な時間はわからないというのが私の考えね。」

「そう………ですか。」

「今回の件は私に責任があるのだし、もし良かったら帰るまでの期間は私が面倒を見ようか？紫様にはその旨は伝えてあるので大丈夫だぞ。」

藍さんが責任を感じてかそのような提案を出してくれる。

しかしながら俺は今紅魔館の方にすでに住まわせてもらっているの
で藍さんの話は大変嬉しいのだが断ろうと思う。それにフ란の教育係の事もあるしな。

「すいません。藍さんの話は大変嬉しいのですが、お断りさせていただきます。俺は今紅魔館の方に住まわせてもらっていますし、特に生活面に関しては問題ありません。だから特に気にしないで下さい。」

「それならいいが。ならば困った事があったら何でも言ってくれ。」

できる範囲ならば力になろう。」

「その時はお願いします。頼りにしてますよ。」

「それじゃあ、話も済んだ事だし私たちは帰るわね。それと恭一、今回の事は大変申し訳なく思っているわ。今度改めて御礼を行なわせていただくわね。それと霊夢も、また会いにくるわね」

「別に来なくてもいいわよ。あなたたち妖怪が来たら、人里の人が怖くなって余計に此処の神社に来なくなるじゃない。そうしたらお賽銭が入ってこなくなるし。」

「そう言わないで。じゃあまた今度、霊夢。恭一。」

「では、失礼する。また会おう恭一。それと博麗の巫女。」

そうやって八雲さんと藍さんはスキマを作ってその中に入っていた。

その姿を見るとやっぱりこの人達が妖怪なんだなと思う。見た目は綺麗な人達だったのでなおさらそう感じてしまう。

「さて、恭一さんって言ったかしら？まさかさっきの紫の話を全部信じたわけじゃないでしょうね？」

「え？ちゃんと親切に話してくれたじゃないか八雲さんも藍さんも。」

「それが胡散臭いのよ。あの二人は妖怪なのよ。それに紫があんな素直に人間に対して謝罪するのを初めて見たわ。普段の紫なら連れてきた人間はそのままにして妖怪に食われようがどこかで野垂れ死

にしようがお構いなしだもの。藍に関してもそうね。」

「それなら、さっきのあの二人の謝罪は何だったんだ？」

「それは、分からないけど兎に角あの二人には気をつけたほうがいいわよ。あなたの魂が消耗しているってのは私も感じているから本当でしょうけどそれ以外はどうも胡散臭いわ。あの紫の式神がスキマを暴走させた事なんて見たことないしね。気をつけるに越した事はないわ。」

そう………か。

八雲さんとの関わりは初めて会った俺よりも霊夢の方が長いのだからその言葉を胸に留めておくことにする。

それにしてもただの人間の俺をこんな所に連れてきて何の考えがあるのだろうか？

「色々心配してくれてありがとう。」

「別にあんたのことが心配なわけじゃないわ。ただあまり人に死なれるのも困るだけよ。」

「それでも感謝はしとくよ。フランの件でも助けてもらったしね。」

「そう。素敵なお賽銭箱はあそこよ。」

「だから金は無いんだって。」

賽銭箱を指差す霊夢だが何回も言うように俺は此処で使える金は持っていない。

「そのうち金が入ったらちゃんと入れに行くよ。」

「その時はまた歓迎してあげるわ。さて……色々あって夜も遅くなったわね。夜の1人歩きは危ないから今日は此処に泊まって行く？ご飯を作ってくれた件もあるし此処に泊まってもいいわよ？」

確かに早めに帰る予定だったが色々あったことで大分辺りも暗くなってきたし霊夢の提案も嬉しいのだが

「いや、今日は帰る事にするよ。紅魔館の皆にも今日は帰ると言っ
たしね。あまり心配させても悪いと思うから。まあ、あの人達だから心配はしてないかもしれないけど。」

フランや美鈴さん。小悪魔さんなんかは心配してくれそうだが、残りの連中は特に心配してなさそうだ。

レミリアはフランが大事なだけだし、咲夜さんはレミリアが大事。
パチュリーはあって間もないが特に何を考えているかわからないし
………純粹に心配してくれるのはフランと優しそうな小悪魔さんと
美鈴さんぐらいなものだろう。

「だから今日はもう帰る事にするよ。それじゃ、また機会があったら尋ねるよ。」

「そ。それじゃあまたね。」

霊夢と分かれて博麗神社からでる。辺りも暗くなってきたし早く帰らないとな。

今日は時間はかかるが元の世界に帰れることが分かっただけでも善しとしよう。

そんな事を考えながら紅魔館への道を歩いて帰るのだった。

第7話 親切な行動には裏がある？（後書き）

色々考えたのですが全部は全部説明せずにこれから先に徐々に恭一が何故必要だったのか明かして行きたいと思います。

第8話 夜の一人歩きはやっぱり危険！（前書き）

今回はルーミア登場の回です。

第8話 夜の一人歩きはやっぱり危険!

「道も暗くなったな。街灯とかの明かりがないから本当に暗いな。」
霊夢と別れてから紅魔館に帰る途中の山道を歩いて帰っているのが辺りも大分暗くなり夕方に帰るつもりが夜になってしまった。

「こんな暗くなるんだったらおとなしく霊夢の所にでも泊まっておけばよかった。」

そう考えるのもあとの祭りであり、俺は肩を落としながら暗い山道をゆっくりと帰っていく。

あまり急いで帰ると足元が暗く見えないため木の根などに躓いてしまうのだ。

「あれ? あそこだけ以上に暗いぞ?」

黙々と歩いて帰っていると前方の一部分だけ周囲と比べて異様に暗くなっている場所があった。

それはもう暗いというよりかはその部分だけ闇に包まれているような感じだった。

「なんだこれ? 何でここだけこんなに暗いんだ?」

不思議に思って近づいていくとその暗闇から女の子の声が聞こえてきた。

「おいしそーな人間の匂いがするのかー」

この暗闇喋んの？という原理で喋ってるんだろ？
そんな事を考えていると不意にその暗闇が薄れてきて中から金髪で
ショートカットの女の子が現れた。

「おいしそーな人間がいる。あなたは食べてもいい人間？」

暗闇が薄れて現れた女の子にはビックリしたがそれよりも女の子が
言った言葉がすごい気になる。

この子俺の事をおいしそうだとか言わなかったか？

「もう我慢ができない。いただきますーす」

俺が何かを言う前に我慢ができなくなったのかそういつて大きな口
をあけて俺の腕に噛み付こうとする女の子。

俺は慌ててそれを避けてから

「ちょ、ちょっと待った！いきなり俺を食べようとしなくてくれ。
俺は食べ物じゃないぞ！！」

「お兄さんは人間じゃないの？」

「え？そりゃあ、人間か妖怪かと言われたら迷うことなく人間と答
えるけど。」

「だったら大丈夫。わたしの好物は人間だから問題ないよ。」

いやいや、俺的にそれは大問題だよ。

だってこのままだったら俺目の前の女の子に食われるんだぞ。

俺を食べるといったんだから十中八九この子は妖怪なんだろう。

「ちょっと待って！俺を食べるんじゃないかと別物があるからそれにしないか？」

「別の食べ物か？何かあるの？」

目の前の妖怪の女の子……ルーミアに言われて俺は慌てて懐からおにぎりを取り出す。

「俺を食べないでいてくれたらこのおにぎりと漬物をあげよう。それで勘弁してくれないか？」

霊夢のご飯を作ったとき俺も後で食べようとしておにぎりにして作ったのだ。

漬物は帰りに霊夢がご飯のお礼にと、くれた物で帰りに歩きながら食べようと思っていたのだ。

「んー？わかった！今日はそれでいいよ！」

良かった！これで駄目なら逃げる事しかできなかったし。

俺はルーミアが承諾してくれてほっとため息をついてから言った通りルーミアにおにぎりと漬物を渡す。

「ありがとうなのかー。それじゃあ、いただきますーす！」

言うや否や凄い勢いでおにぎりを食べていく。

おにぎりは大きな物が3個ぐらいあったのだがあつというまに全てルーミアのお腹の中に収まってしまった。

「おいしかったー。どうもありがとう。」

一先ず助かったのでよしとする。

「そういえばお前の名前は何ていうの？わたしの名前は教えたからお前の名前も教えて？」

「ああ、俺の名前は日野 恭一っていう。この前此処に来たばかりの人間だ。」

「分かった。恭一ね。私の名前はさっき教えたからいいでしょ？」

「ルーミアだろ？それはもうわかっているけど何で俺を食べようとしたんだ？」

「それはお腹が空いたから。それにここ最近人間を食べてなかったから久しぶりに食べたくて。」

そんなことを聞くとこの子が妖怪なんだということが分かる。

特に何の抵抗も無く人間を食べると言うなんて普通の人じゃあ言わないだろう。

「別に人間じゃなくてもいいんだろ？おにぎりとかも食べたんだし、できたら人間以外のものを食べてくれないか？」

「んー？そう言われてもやっぱり一番食べ物の中で美味しかったのは人間だし、そればかりは駄目だと思う。でも恭一はご飯をくれたからしばらくの間は食べないでいてあげる。」

「それは嬉しいけど、俺としてはできるだけ他の人も襲って欲しくは無いんだけど………」

同じ人間なんだし他の人も襲わないでいて欲しいと思うのだがこれ以上言うともた襲われそうなので黙っておく。

誰だって自分の命が惜しいのだ。

「じゃあ、お腹いっぱいになった事だし私はもう行くね！また会おうね恭一！」

「できればあまり会いたくないんだけど……まあ、またなルーミア。」

お互いに別れの挨拶をしてルーミアは空に浮いてそのまま飛んでいく。

「今回は食べ物を持っていてよかった。次にルーミアに会うときは俺が食べられないように食べられる物を持ってた方がいいな。」

しかしあんな可愛い外見をして「食べてもいい？」なんていわれるとさすがに怖いもんがあるよな。

「怖い思いもしたことだし、もうそんな思いをしないためにも早く紅魔館に帰ろう」

俺は先ほどよりも早く歩きながら紅魔館に帰るのだった。

第8話 夜の一人歩きはやっぱり危険！（後書き）

今回は文章短めになってしまいました。

なかなかルーミアの話かたをどうしようか迷いました。
でもルーミアの性格自体はあほの子っぽくて好きです。

第9話 二回も死にかけたら何かの力に目覚めそう! (前書き)

今回のお話は展開ががらりと変わります。

第9話 二回も死にかけたら何かの力に目覚めそう！

「ただいまー」

あれから無事に何事も無く紅魔館に帰ることができた俺。
紅魔館に着き、帰宅を伝えるため声をだしたら

「おかえりー恭一！！なかなか帰って来ないから心配したんだよー
！！！！」

俺の帰りをずっと待っていたのかフランが俺の声を聞くやいなや物陰から現れて俺の方に文字通りのかなりの勢いで飛んできた。

「はは！心配してくれたのか！ありがとうフラン！」

そのままフランを抱きとめようとし、ある事に気づく。

フランが全速力でこちらの方に向かっている。

←
フランは力が強く、体も頑丈。

←
この前はしゃぎ過ぎて廊下の壁にぶつかってしまいフランが弾き飛ばされるのではなく壁が粉碎した。

←
その速度で俺の方に向かって飛びつく姿勢をとっている。

←
俺死亡。お疲れ様でした。

てな事になる。

いかん！そんな死に方は恥ずかしすぎる！

幼い子供に嬉しいあまり飛びつかれて死にましたなんて事になったら死んだ後も笑われてしまうかもしれない。

それは断固として止めなければ！

「フラン！ちょっと待った！できればもう少しゆっくりした速度で来てぶるああ！！！」

「恭————！！！！！！！」

薄れいく意識の中、最後に見たのは目じりに涙を浮かべたフランの心配そうな顔だった。

—————

「あれ？ここどこだ？っていうのも結構言ってるような気がするけど、ここ何処だろう？」

辺りを見回して見るとそこは今まで見たことの無い場所。

あの状況から考えるとまた賽の河原にでも来たのかと思ったがどうやらそことは違う場所らしい。

「とりあえず辺りを歩いてみるか……………」

ぽーっと突っ立っていても何も始まらないのでとりあえず何か無い

か辺りを歩いてみる。

土のような地面なのだが歩くたびに足元がどうもフワフワしており上手く踏みしめられない。

そんな状態で歩いていると何だか階段のようなものが見えてきて近くに寄ってみる。

「どうやら上の方に続いているみたいだな。」

どうやら上の方に続いているらしく、他に周囲は何も無いのでとりあえず階段を上がってみる。

「さっき博麗神社の階段を降りたばかりなのにまた上らないといけないのか………」

上り始めてみるとかなり長い階段で俺はつい愚痴をこぼしてしまう。しかしながら一度上り始めたので最後まで上ってみる。

頂上につくとそこには白色の建物が階段の終点に立てられていた。

「一先ず中に入ってみるか………すいませーん！誰か居ますかー！ー！ー！」

声をあげて誰か居ないか確認する。

すると少しすると建物の奥からぱたぱたと足音が聞こえてきた。

「はーい！誰ですかー？」

建物の奥から現れたのは白い髪のおかっぱ頭の女の子だった。

外見的には髪が白いのが珍しいのだが、もう1つだけ付け加えるとなにやらその女の子の体に白っぽい魂のような物がまわりついていた。

「あら？あなたはどうも人間のようなですね？このような所に何の御用なんですか？」

「此処がどこか教えてほしいんだけど……気がついたら地面に立っていて当てもなく彷徨っていたら偶然ここを見つけたんだ。」

「この建物は白玉楼といいます。それでここは冥界のようなもので普段ならば死んだ人しか来ることはできません。多分今のあなたは一時的に肉体から魂が離れて此処にきているのでしょう。」

そして俺の背を指差し

「あなたの背中にまだ肉体との絆が見えますからね。でも、三途の河に行かずに何故か此処に迷い込んでいるのか……何か心当たりはありませんか？」

「いや、特に心辺りは無いんだけど。」

「そう……ですか。あ、申し遅れました私はこの白玉楼の庭師をやっている魂魄 妖夢と申します。あなたのお名前は？」

「あ、俺の名前は日野 恭一っていうんだ。よろしく、妖夢。それで話を戻すけどここから帰ることはできるの？」

「こればかりはどうする分けにも行きません。もしそのまま生きる事ができるのなら魂が体に引っ張られますし、死ぬようでしたら魂と肉体の絆が切れてしまいます。」

「え？この絆があると生き返る事ができるんじゃないの？」

「必ず生き返る事ができるというわけではありません。それは、今はまだ肉体との絆があるというだけの目安みたいな物ですから。あなたが魂でいる間、体がそれ以上の怪我などを負ってしまった場合などは魂が戻ることができないようになり、絆も切れてしまいます。そうなるとそのまま肉体に戻れずに死んでしまいます」

絆があるからといって安心できないということか……フランの奴がこれ以上俺の体を傷つけないければいいんだけど……そこはかとなく不安だ。

「まだ魂が帰る兆候も無いみたいですし、此处で少しの間待ってみてはいかがですか？その内、肉体に帰る事ができるかもしれませんですよ？」

「いいの？何処に行っていいかわからないし、できればここに少しの間居させてくれればと思っていたんだけど」

「はい。特に今は急ぎの用事などありませんし、別にかまいません。でも先にこの白玉楼の主にお伺いを立てた後になりますけどよろしいですか？」

「妖夢の他にも誰かここに？」

「はい。私の主が住んでいらっしゃいます。その方がこの白玉楼の持ち主なのでその方に聞いた後からでないと入れることはできません。今から聞いてきますので、少しの間待っていてくださいね。」

そういつて妖夢は白玉楼の中に入っていく。

あ、しまった！妖夢にあの体にまわりついている白い人魂のよう

なものを聞くのを忘れてた。
そんな事を思いながら俺は妖夢が戻ってくるまで待っていた。

――――

「お待たせしました。私の主にお伺いをたてたところ、どうやら一度会って見たいとの事なので一先ずこの白玉楼の中に入ってください。」

お？話を聞く限り妖夢の主っていう人と会うことになったみたいだ。
あんまり怖い人じゃなければいいんだけど

「大丈夫ですか？恭一さん？」

「ああ……大丈夫。妖夢の主っていうからどんな人なのかと思って。」

「私の主は優しいから大丈夫ですよ。初対面の人にそこまで無碍な扱いはしません。だから安心して付いてきて下さい。」

「分かった。ありがとう妖夢。それじゃあ、連れていってくれ。」

そうだな。初対面の人にそこまで怖いことをしないよな。

「それじゃあ、私の後に付いてきて下さい。」

「あ！その前にちょっと待った！行く前に聞きたい事があるんだけどいい？」

「はい、何でしょうか？」

「さっきからその妖夢の体にまわり付いている白い人魂みたいな物は何なんだ？聞こうと思ってたんだけど中々タイミングが無くて。」

「ああ、この子の事ですか？」

妖夢はその白い人魂を一撫ですると

「この子は私のもう1人の存在みたいなものです。私は半人半霊とって半分が人間で半分が霊なんですよ。人間の部分が私で、もう半分の霊の部分がこの子なんです、だから二人あわせて私という存在になるんです。」

「へえーそうなんだ。今まで見てきた妖怪とかは全員人間の姿をしていたからなー。」

藍さんは尻尾とか耳とかは人間のものじゃなかったけど、姿自体は人間だったからこういった、人間以外のものは始めてみるので興味がわいてくる。

「この子の事も分かったところで早く行きましょうか。あまり待たせるのもいけませんし。」

「分かった。それじゃあ行こうか」

それにしても白玉楼の主人かいったいどんな人なんだろう？

第9話 二回も死にかけたら何かの力に目覚めそう！（後書き）

はい！そういうわけで白玉楼編となりました！

どういう風に妖夢や幽々子に会わせようか？と思い、そういえば恭一は一回冥界に行っているからもう一回つれて行ってそこで会わせるか！

と言う事でこのような展開に持って行きました！

第10話 駄々っ子は困る……特に大人の場合だと。(前書き)

今回は幽々子登場の回です！

第10話 駄々っ子は困る……特に大人の場合だと。

「ここが白玉楼の主の部屋になります。」

白玉楼に入り、妖夢に案内してもらって部屋の前に辿り着く。

白玉楼の内装は日本家屋に似ており目の前の扉もドアではなく障子だった。

「失礼します。幽々子様、先ほどお話した方を連れてきました。」

「どうぞ。お入りなさい。」

障子の向こうにいる女性がそういうと妖夢と俺は障子を開けて中に入る。

中に入ってみるとそこには、ゆったりとした着物を着た美しい女性が座ってこちらを見ていた。

頭の帽子がちよっと変な形だがそれ以上に美人なのでそんな物は特に気にはならない。

部屋に入ると座っている女性が俺を見て、

「初めまして、珍しい生霊の殿方。私はこの白玉楼の主を務めております西行寺 幽々子と申します。以後お見知りおきを」

「ご丁寧にも。俺の名前は日野 恭一と言います。色々あって生霊みたいな物になったらしいんですけど……とにかくよろしくお願いします。」

先に西行寺さんの方から名乗ってくれたので、俺も慌てて名前を名乗り返す。

それにしても丁寧な話し方をする人だなと感じた。

「妖夢から大体の話は聞かせていただきました。それでもしよかつたら魂が体に戻るまでの間、この白玉楼に住まわれてはいかがかしら？」

「え！？いいんですか！？そういつてくれると俺としては非常に嬉しいんですけど……本当にいいんですか？」

「幽々子さまもこうおしゃられている事ですし、しばらくの間住まわれてはいかがでしょう？この白玉楼には私と幽々子様の二人しか現在すんでいないですし、日野さんが居てくれると大分賑やかになると思いうんですけど。」

「そうかな？」

「はい。それに冥界の外の話も聞きたいです。丁度いいと思います。」

「あゝごめん！実は最近この幻想郷に来たばかりなんだ。だから外の話と言っても俺の世界の話しかできないけどどれでもいい？」

「はい！逆に幻想郷の外の話を聞けるなんて嬉しい限りですよ！色々幻想郷以外の話を聞かせてください。」

「私も、幻想郷以外の外の話もお聞きたいのでぜひ！此処に住まわれてください！」

「そういつていただくと大変嬉しいんですけど………魂魄さんもそれでいいの？」

「はい！もちろんです！これからよろしくお願いします！日野さん。」

「よろしくお願いしますね。日野さん。」

「二人とも、俺は居候の身になるんだから気軽に名前で呼んでください。その代わり俺も名前で呼ばせてもらってもいいですか？魂魄……妖夢もいいかな？」

「ええ、かまいません。改めてよろしくお願いしますね。恭一さん。」

「私もいいですわ。よろしくお願いしますね恭一さ………」

妖夢につづき幽々子さんが俺の名前を半ばまでいったとき不意に幽々子さんのお腹からぐぐ！>とう音が聞こえてきた。

幽々子さんは俯いて黙ってしまった。

「あ、あの！幽々子さん俺は何も聞いてませんよ？」

「わ、私も！！幽々子様！私も何も聞いていません！」

女性なのでお腹の音が聞こえたのが恥ずかしかったのだろう。

幽々子さん自体大人しそうな性格をしているみたいだし顔を隠すぐらい恥ずかしかったのかもしれない

そう思って言ったのだが、幽々子さんはその言葉を聞いて徐々に体を震わせる。

やばい？怒らせたか？もっとオブラートに包んだほうが良かっただ

ろうか？

そんなことを思っていると不意に幽々子さんが口を開け、

「おなかすいた〜！！妖夢、私もう我慢できないー！！早くご飯作ってー！！」

大声で叫びながらじたばたと体を畳に投げ出して言う幽々子さん。誰だ？この人？本当にさっきまで清楚に話していた幽々子さんなのか？

俺は目の前の豹変した幽々子さんの行動に頭が付いていかずに体が固まってしまう。

「あー！もう幽々子様！それぐらい少しは我慢してください！ここに初めて来られた恭一さんの前なんですよ！もっと白玉楼の主としての態度を取ってください！！」

「もう無理ー！！お腹すいたお腹すいたお腹すいたー！！！！」

先ほどの威厳など微塵に碎くような勢いで畳を転げまわる幽々子さん。

そしてその光景をみて幽々子さんに向かって声を荒げる妖夢。

ほんと、なんだこの光景？あ、そういえばフランは俺が目覚まさないと心配して無いかな？早く帰れるといいな〜。

俺はそれが納まるまでの間、一人虚空に目を向けて現世で俺の事を心配しているだろうフランの事を思いながら現実逃避を行なうのだった。

「お腹すいた〜！！！！！！」

「もういいっちゅうねん！！！！！！」

あ！やべ！つつこんじゃった！！

――――

「それで、幽々子さんはお腹がすいてどうしても我慢ができずにこ
うなってしまったと。」

「うん、その通りだってお腹が空いて仕方がないんだもん。」

「それで、さっきまでの態度は作った演技だったんですか？」

「そうよ。今話しているのが本来の私よ。先ほどまでのたたずまい
は全部妖夢の指示によるものなの。頑張ればご飯を豪華にしてくれ
るって言われて頑張ったんだけどお途中でお腹が空いてしまって我
慢ができなくなったの」

幽々子さんの言葉に今度は妖夢のほうに顔を向ける。

「みょん！？」

へみょん！　　って何だよへみょん！　　って。

「うう、すいません。幽々子様は本来、あのような性格なんですけ
ど見ても分かれるとおり威厳いうものがあまり感じられないのです。
ですから少しでもこの白玉楼の主として相応しい態度をとってもら
おうと思い、食べ物で釣ったのですけど途中でボロがでてしまいま

した。

項垂れながら話す妖夢。

そしてまたお腹が空いたと言って喚きだす幽々子さん。

「はいはい！分かりました！ご飯は俺が作りますから幽々子さんは少し落ち着いてください。それに妖夢もいつまでも項垂れていないで幽々子さんのご飯を作るぞ！幽々子さんの好みの物が分からないから一緒に作って教えてくれ！」

「え！？ほんと！？あなたが作ってくれるの！？なら私、外の世界の食べ物食べてみたいわ。」

「いいえ！恭一さんはこの白玉楼のお客様になるんですからそのような事はさせられません。ご飯なら私が作りますから」

「ここに住まわせてもらう以上何か手伝いでもさせてよ。それに料理は俺もできるからよかったら作らせてくれないか？」

「そこまで恭一さんがおっしゃるなら……その代わり私も一緒に作ります。幽々子様は大食漢の方なのでかなり多く作らないと満足しないので」

「わかった。じゃあ、一緒に作ろう。それじゃあ幽々子さん。俺たちはご飯を作ってきますね。」

「わかったわ。できるだけ早くお願いね」

そういつて俺と妖夢は白玉楼の台所に急ぐのだった。

「まあ、これぐらい作れば幽々子さんも満足するだろう。」

目の前にはこれでもか！というぐらいの様々な料理を載せている皿がある。

「ええ、これぐらい作れば幽々子様も満足なさると思います。」

台所に入り料理を作っていたのだが当初は大食漢といっても女性なので精々3人前ぐらい作っておけばいいと思ったのだが、妖夢から幽々子さんは一食の食事で人の10人分ぐらいは食べると言われた。本当にそんなに食べるのか？と思ったのだが目の前の喋っている妖夢の顔がマジの顔だったので俺と妖夢はさらに料理を作り足して小さな宴会ができそうなほどの料理を作りあげたのだった。

「俺が洋食中心で妖夢が和食が中心だったから結構な種類の料理ができたな。」

俺はフランにも作ってやったハンバーグから始まり、洋食中心のメニューを作り上げていった。

どうも幻想郷の大半は日本の昔の生活をしており、この白玉楼も日本家屋の形をしていたので洋食中心で作っていた。

他にも微妙にご飯などではなくチャーハンといった中華も混ぜて作った。

そしてそれに加えて妖夢は和食中心だったので多種多様な国の料理が並べられていた。

「でも、私が見たことの無い料理ばかりで驚きました！恭一さんは色々な料理を知っているんですね。」

「まあ、家の母親が料理を作れなかったから仕方なく覚えていったっていう感じかな。それで味の方は大丈夫？」

味の方を妖夢に美味しいかどうか確かめてもらう。

「はい！とっても美味しいですよ！初めての味ですが私の作る和食とはまた違ってとっても美味しいです。」

「それならよかった。じゃあ、幽々子さんの所に早くもって行こうかお腹を空かせて待っていると思うし。」

「はい。持って行きましょう。」

俺は料理の載った皿を両手に持ち幽々子さんが居る部屋に向かう。隣には妖夢が同じく両手に皿を持っているのだが霊夢の人魂？みたいなものも尻尾で上手く皿を抱えており一緒に運んでいる。

「幽々子さんお待ちせしました！料理ができましたよ！」

幽々子さんのいる部屋に入ると幽々子さんは床に寝そべっていた。おいおいあの初対面の態度はどこにいったよ？と思うほどの変わりようだった。

「ご飯できたの！？」

俺のご飯という言葉を聞くや否や寝そべっていた体勢から一瞬でテ

ーブルの前に座る。

「この変わりようは一体何なんだろう？まあいいや……幽々子さん
テーブルに置きますけどまだ食べないで下さいよ？」

「え？」

危ない！この人置いた瞬間にもう箸を持って食べようとしていたよ！

「もう！幽々子様！全部の料理を並べるまで食べるのは待っていて
ください！」

「はーい」

どんだけお腹がすいているんだこの人？幽々子さんが先に手を出さ
ないように慌てて残りの料理を持ってくる俺たちだった。

――――

「それじゃあ、いただきます！」

「いただきます」

食事の挨拶をすると幽々子さんは怒涛の勢いで次々と料理を口の中
に運んでいく。

「んーおいしい！恭一の料理は食べたことの無い料理ばかりだから

「どんどん口の中に入っていくわ」

「口にあって良かったです。それより本当に良く食べますね」

食事が始まってものの数分でもう何皿か空になってしまい、それでも幽々子さんの食べる速度は落ちずにまた別の料理を食べていた。

「幽々子様は本当に良く食べられるお方なんです。だから毎日の食事を作るのが大変で大変で。」

この光景をみると妖夢の言葉にも納得してしまう。
 どんだけ食べるんだろうなこの人？

「はぐはぐはぐはぐはぐ……!!!」

幽々子さんの食べる光景に終始圧倒されながら食事の時間は過ぎていくのだった。

第10話 駄々っ子は困る……特に大人の場合だと。（後書き）

幽々子はやっぱり腹ペコキャラだと思えます。

亡霊になる前の幽々子はお嬢様みたいなものだから丁寧な言葉も使えると思うんですけど、何か書いていてスッキリしなかったんでのような感じにしました！これから先も幽々子はこのような感じで進んでいくと思います。

……そして妖夢はやっぱり苦勞人氣質☆

第11話　これであなたも仲間入り？（前書き）

今回は恭一、霊力に目覚める！の回です。

第11話 これであなとも仲間入り？

「はく食べた食べたく恭一の料理も美味しかったし満足だわく」

あのあと作った料理の殆どを幽々子さんが食べて拳句の果てにデザートまで要求してきやがった。

「そんな体が細いのは何処にあれだけの量が入るんだろうね？」

「それは私も疑問に思っていたのですが今ではあれが普通になってしまったので特に何も感じないようになってしまいました。逆に幽々子様が殆ど食べない時などは何かあるのかと思うぐらいです。」

俺と妖夢が満足そうにしている幽々子さんの顔を見て話をする。
あ、おもむろに幽々子さんが横になりだした。

「幽々子さん食べて直ぐに寝たら牛になりますよ」

「いいのよ、私亡霊だから太ったりしないの」

そういつて横になると物の数秒で寝息を立てだす幽々子さん。

「ねえ妖夢、亡霊ってどういう事？」

「幽々子様は肉体が無く魂だけの存在なのです。ですが普通の人と同じように食事もなさいますし睡眠をとったりします。ですから特に普通の人と変わりはありません。」

へえくそうなんだ。亡霊とか言うのと体に触れなかったり何も取らな

くてもいいような存在だと思っていたのだけどそんなことはないんだ。

「と言っても幽々子様が特殊なだけなんですけど……普通の幽霊などは食事を取る必要ありませんし睡眠をとる必要ありません」

「あ、やっぱりそうなんだ。」

やっぱり幽々子さんが特殊なだけなんだ。

「さて、幽々子様もお休みになられた事ですし私は食事の片づけをいたします。恭一さんもゆくっりなさっていてください。」

「いや、俺も手伝うよ。妖夢だけにさせるのも何だか悪いし最後まで手伝うよ。」

「いいんですか？」

「うん。それにゆっくりするっていつでもボーっと景色を見るぐらいしかないし……なにかしてたほうがいい暇潰しになるよ」

「でしたらお願いしますね。それじゃあ持って行きましょうか」

「了解」

俺と妖夢は食べた食器を片付けるために一緒に台所にへと引き返す。その間も幽々子さんは畳の上に横になって寝息を立てているだけだった。

――――
――――

あれから一週間ぐらいたち俺は大分白玉楼の生活にも慣れてきた。
大体朝起きて食事を妖夢と一緒に作り、昼までの間ノンビリと過ごした後、妖夢と一緒に昼食を作る。

そして昼から夕方にかけて白玉楼の掃除をして、これまた妖夢と一緒に晩御飯をつくる。

大体そこら辺の主婦の人と代わりのない生活を送っているのだが、一食に作るご飯の量が半端なくその大半が主に幽々子さん1人で消費されていく。

挙句の果てに幽々子さんが食べ足りない時は俺のおかずまで取られてしまうのでご飯を食べる際などは細心の注意をしながら食べなければならぬといった状態になっている。

そして、幽々子さんの生活だが、日々食っちゃ寝、食っちゃ寝、の生活を繰り返して駄目ニートのような生活を送っていた。

今日もまた朝、昼ご飯を妖夢と一緒に作っていつものごとく白玉楼の掃除をしようと思っていたのだが、この日はいつもと違い珍しく起きていた幽々子さんに呼び止められたのだった。

「ねえ恭一ちょっといいかしら？」

「あれ？幽々子さん今日は起きているんですね。何か用ですか？」

「そんないつも寝ているばかりじゃないわよ。私も忙しい生活を送っているの。」

おかしい、俺が見たのは毎日毎日食っちゃ寝、食っちゃ寝をしている幽々子さんの姿しかないんだが。

「まあ、その辺は置いといて、あなた高い所を掃除するとき椅子とかを使って掃除しているみたいだけど何で空を飛ばないのかしら？」

「空を？俺が飛べるわけじゃないですか。大体俺は人間ですよ？別に特殊な力なんて持ってないですし」

「あら？そうなの？でもあなたの体から微妙に霊力みたいなものが出ているからってつきり空も飛べるものだと思っていたのだけど。」

霊力？何かの間違いじゃないのだろうか。もともと俺の体は今肉体から離れて魂だけの生霊状態だからそう思えたんじゃないのだろうか？」

「現に今も霊力をあなたから感じとれるのだけど、もし扱い方が分からなかったら私が教えてあげましょうか？今は特に何もすることないし。」

「いつもする事が無いの間違いじゃないですか？」

「そんなことないわよ。それで、私の教えを受ける気はあるの？」

「ええ、俺に霊力なんてものがあるのならぜひ教えてください。色

々役に立ちそうですし。自分の体を守ることもできそうですしね。」

霊力といったらあれだろ？陰陽師とか霊能力者とかが持っているやつだろ？漫画とかでみるとその霊力を使ってドンパチしていたから多分、自衛手段にも使えるはず。

それに幽々子さんの話を聞く限り空を飛べるような事もいつているからもしかしたら飛べるようになるかもしれない。

そういった事を思いつつ幽々子さんの教えを受けることにする。

「そう。なら色々教えてあげるわね。まずは……………」

幽々子さんの話を要約すると人間の魂はもともと力を持っておりそれを霊力というらしい。

そしてその霊力を自分の意思で自由に操る事ができればそれは体の外の世界……つまりは現実において何かしろの形となって力になるらしい。

例えば体にたとえば身体能力の向上。

外に放出すれば漫画であるような現象となって手から光の弾を出して敵に攻撃することができるようになったりと、その用途は多種多様にわかれるらしい。

いまいち俺の頭はそれほどできのいい物では無いので幽々子さんのいう説明に理解が追いつかないのだが兎に角その霊力を操ることができる俺もめでたく空を飛ぶこともできるらしい。

空を飛ぶことにはあこがれもあったし、その話を聞いて俄然やる気が出てきた。

「幽々子さんこれからお願いしますね！」

「ええ、まかせなさい」

こうして俺の白玉楼での生活で家事手伝いの他に霊力の修行も加わるのだった。

「こんなもんでいいのかな？」

「はい、良くできていますよ。そのまま意識を集中させてその形を保ってください。」

今、俺と妖夢は白玉楼の庭先で霊力の修行を行なっている。

あれから幽々子さんに教わる以外でも暇があれば妖夢にも見てもらい、今ではやっとなさ手の掌に霊力の弾を出すことができるぐらいまで成長することができた。

これを木にぶつけると木が少し削れるぐらいまでの威力が出るのだから大分進歩したといっても言いぐらいだ。

最初のうちなどは出すこともできなかったし。

出すことができるようになってからも直ぐに霧散したりと中々上手くできなかつた。

しかしながら辛抱強く頑張ってここまでできるようになったのだ。

「大分、恭一さんも上手く集中できるようになりましたね。ではそろそろ空を飛ぶ練習を始めましょうか。」

「え？マジで！？ようやくそこまで進んだんだ！」

「あなたが頑張ったからよく。それにあなた自身にも少し才能があったのかもしれないわね」

幽々子さんがいつの間にか現れてそう言ってくれる。

「ありがとうございます。そういわれると頑張ったかいがありました。それで、話を戻しますが、空を飛ぶってどうやって飛ぶんですか？」

「それはですね……………」

「それはね……………」

「それは？」

「よく分かりません」

「よくわからないわ」

「そうですか。よくわから……………よくわからない？」

二人とも微妙に目線を俺から離しながらそれぞれ喋りだす。

「それが、私は生まれた頃から飛べるようになっていたのよ。だからどうやって飛べるの？って聞かれてもよく分からないのよ。強いていうなら歩くような感じでっていう事ぐらいかしら？」

「わたしも幽々子様と同じでいつのまにか飛ぶことができるように

なりましたから具体的に教えることができません。本当にすみません恭一さん。こればかりは教えようがないんですよ。」

「そう………なんだ。でもどうすればいいんだろう？ 具体的な案もないんだし無理なのかな？」

「いいえ、そこまで悲観的にはならないで大丈夫だと思います。私も含めてですけど大体の人がある日突然飛ぶ感覚が掴めて飛ぶことができるようになりますから、その内恭一さんも飛ぶ事ができるようになりますよ。」

「ごめんなさいね。こればかりは私も教えようが無いの。最初に教えることができるっていったんだけどよく考えたら直感的なものだから霊力の使用法を覚えていければ自ずと飛ぶようになるのかと思ったんだけど考えが甘かったみたい。」

「いえ、そこまで気にしないで下さい。霊力の扱い方を教えてもらっただけでも満足ですし………それにその内飛ぶことができるようになるんでしょう？」

「ええ、たぶん大丈夫だと思うわ。根拠はないけどあなたならその内飛べるようになるはずよ。」

「頑張ってください恭一さん！」

「幽々子さんありがとうございます。妖夢もありがとうございます。」

しかし飛ぶ………空を飛ぶか。歩くやりかたと同じような感覚と違っていたけど空を飛んだことなんて一度もないからな、どうすればいいんだろう？

「さて、それじゃあそろそろ夕飯の時間だから妖夢と恭一もご飯の準備をお願いするわね。」

「はいはい。今から作りますよ。」

「はい。少しの間お待ちくださいね、幽々子様。」

もう夕飯時なんだな……幽々子さんを待たせると俺のおかずまで取られてしまうから早く作らないと。

俺と夕食を作るために慌てて台所に向かうのだった。

第11話 これであなとも仲間入り？（後書き）

さすがに恭一もそろそろ貧弱なままでは不味いと思い今回霊力を使えるようにしました。

まあ、死にかけて人間が霊力に目覚めることがあると聞くので白玉楼という冥界の中ですが、霊力に目覚めるという事にしました。ちなみに恭一の霊力は全然しょぼいです。

使えて便利だなーと思うぐらいの力にしようと思ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5285x/>

幻想郷の日々

2011年10月21日16時04分発行